

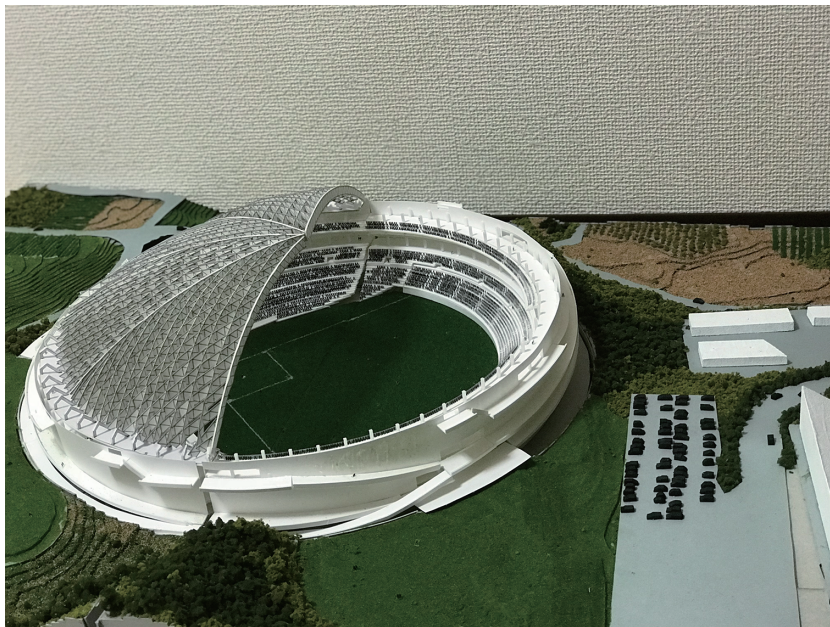
スポーツ公園と避難所

ドーム建築を中心とした災害時の活用の提案

北澤亮太

建築デザインコース

近年、東日本大震災や熊本地震などの大災害が頻発している。日本の避難環境が世界的にも良くないことを知った私は、南海トラフ地震が危惧される静岡県静岡市のスポーツ公園内にドーム建築を用いた避難所空間を提案した。災害時には屋根架構を支える構造部分や架構部分に設けた避難スペース等を解放し長期避難者を受け入れる。また、誰でも自由に回遊できる外周コンコースと、災害時に独立し球場利用者と避難者との動線を分ける外周コンコースを設けることで、両者の共存と球場本来の機能の早期回復を果たす。窮屈な避難所、その状況を打開するドーム球場×避難所の新たな関係性が生まれる。



建築意匠 縮尺模型

つながる

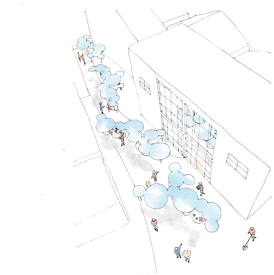
銭湯を中心とした内川周縁部における分散型ゲストハウスの提案

兒島ゆう子

建築デザインコース

富山県射水市新湊内川。

町の中央を通る川の両脇に、長屋が連続して建ち、漁船が並ぶ美しい景色の町。しかし、今では空き家と殺風景な空き地が増加。本提案では空き地のネガティブさを、小さな操作でポジティブに変える空き地と空き家のセットの活用を提案する。本来ひとつの建物に集約されているホテルの機能を町の空き家へ分散し、番台のある銭湯をフロントとした分散型ゲストハウスを展開。空き地+オブジェで、アイキャッチを作るギャラリーや、空き地+地面に描く道で人の流れを作るカフェなど、町と人がつながり、住人とゲストがつながる設計を計画する。内川の伝統的な祭り、曳山祭りでは曳山を引くことを「つながる」と言い、つながる町づくりを目指した。



建築意匠／木造・ガラス／h1100×w1800×d1800mm

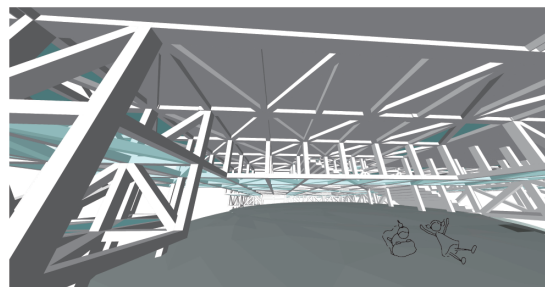
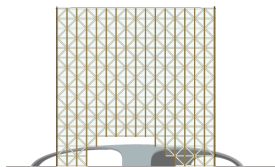
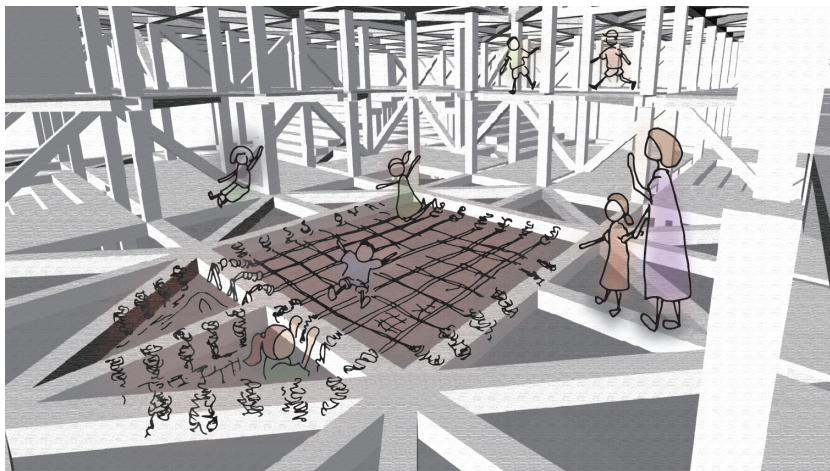
Playground Architecture

遊具と建築の融合

本林真奈

建築デザインコース

誰もが子ども時代にたくさんの時間を過ごしたであろう、遊び空間。現在、都市開発や治安・安全上の不安から、遊びを集約的に展開する屋内遊具への需要が高まっている。そこで私は建物内に設置する遊具ではなく、建物を構成する構造全体が子どもたちの遊び道具となる建築を提案する。基本構造形式からトラスとシェル構造を選択。トラスで組んだ立方体からシェルが足をだして子どもたちを呼び込む。子どもたちはトラスをくぐったりシェルを登ったりしてアプローチする。内部は、隅から隅まで人が通れ、カフェ・ライブラリー等から親と子どもの見る見られるの関係を生み出す。あらゆる場所で子どもたちの遊びの舞台が築き上げられていく。



建築意匠 / 木造・鉄筋コンクリート / h300×w800×d800mm

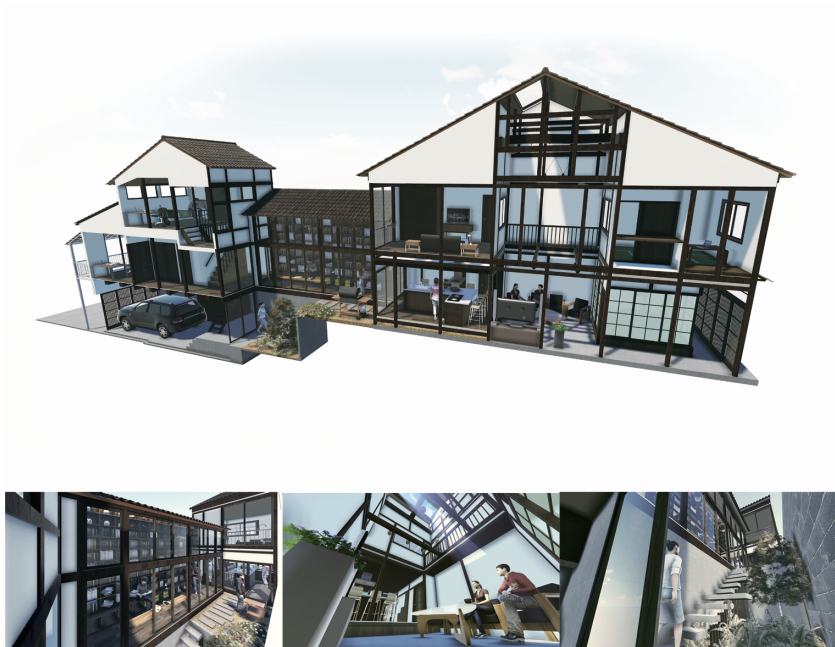
伝統的な町屋の改修における光・熱環境の改善とインテリアとの関係性

高岡市金屋町串田邸改修案

王柯翔

芸術文化学研究科

敷地は伝統的な町屋が軒を連ねる高岡市金屋町の串田邸で、延べ床面積は約145.76㎡がある。今回の改修は、「光・熱環境」を重点的に改善させることで、家族4人(両親、子供二人)が明るくて、開放的で現代的なライフスタイルをおくれるように改修する。採光の改善は、拡張した中庭の周囲に窓を設け、また、新設した吹抜け上部にトップライトを設け、吹抜けからの採光も可能とした。熱環境の改善は、いつでも長く滞在できる空間、猛暑時・厳冬時に長く滞在しない空間、閉じたら滞在できる空間の三つに分けて断熱改修を段階的に行う。このようにライフスタイルに合わせて「光環境」と「熱環境」を改善することで、伝統的なインテリアを出来るだけ残した。



建築意匠／パース

都市公園のリノベーション —西池袋公園をケーススタディとして—

図面・模型
h320×w600×d2400mm

飯島 ひかる
造形建築科学コース

近年、都市部における緑の減少が問題となっている。また、大規模の都市公園は年々利用率が増加しているが、小規模の都市公園(街区公園など)の利用率は減少している。そこで本計画では、小さな都市公園の利用率を上げ、かつ都市部における緑を増加するため”都市公園のリノベーション”を提案する。

具体的には、既存の樹木を考慮した公園内の建築可能エリアに樹木を積層し、各層に樹木を使ったアスレチックや普段と違うアイレベルの緑との体験、などといった緑と密接に関係づけられた内外の空間を配置する。構築物は4棟の分棟形式とし、各棟ごとに芸術、子供、学問、スポーツといったテーマを持たせ、さらに各層の内部空間は入れ子形式の分散配置とすることで、各々の部屋を移動する際に、自然を体で感じられるよう必ず外部空間を散策する計画とした。また立体化された緑は、ヒートアイランド現象を低減し、周縁の建物の中層部からも緑を楽しめるようになっている。このように、都市の中で気軽かつ身近に豊かな緑を感じられる建築を私は提案したい。

model image



section



perspective



siteplan



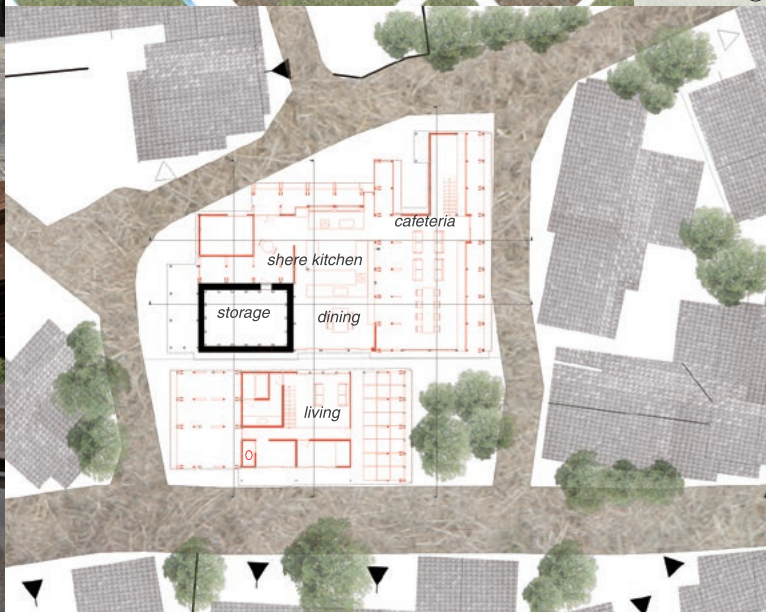
ローカルコモンズによる 島集落の再構築

一納屋の活用を中心とした
賃貸・シェアスペースの計画ー

模型・パネル

池田 駿希
造形建築科学コース

西ノ村は石川県白山市に位置する、人口103人36世帯の島状集落の一つである。以前は個別で稲作業が行われていたが、今は効率性を優先し集落営農によって営まれ、農業に従事する村民に限られていることから、かつて農作業を通じて盛んに行われていた村民同士のコミュニティも衰退し、個人の農器具を格納していた各戸の納屋は、曖昧な用途のまま存在している。そのような納屋が解体され、農業が行われていた証がなくなってしまうように、新たな役割を持たせ、納屋の存在が村の衰退した慣習を再生するような建築計画を行う。具体的には納屋を賃貸化することで村外住民を受け入れ、ローカルコモンズ化することで、住民間の交流の場をつくり、敷地を超えて村を広く使うことを提案する。納屋には屋外から室内にかけて雁木が通り、それが構造補強となったり、他者が利用するための道しるべとなる。小さな建築は大きくまちを変えられないが、地域に根付くものに気付き、その存在価値を再考することは潜在的な村の良さを引き出すために必要であると考えます。



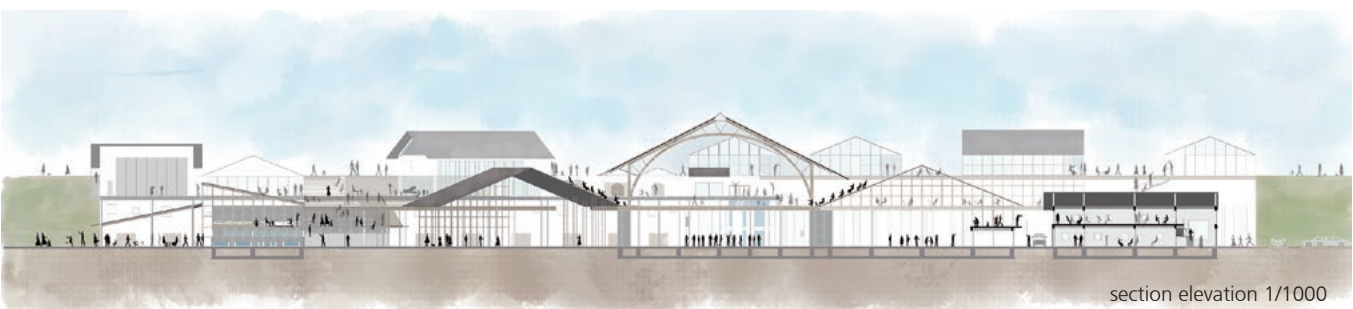
次世代に適う市場の再構築

MDF合板・スチレンボード・アクリル板・ヒノキ棒
h400×w1800×d1200mm

表 佑佳

造形建築科学コース

本計画敷地である加賀橋立は、海と農作地の間に位置する小さなまちである。新鮮で豊富な水産物に関わる人々の営みが作り出す豊かな情景が色濃く残っている。かつては、北前船の船主の村として栄え、地域間交流の要として、当時の最先端の知識や技術の集積・発信の場となっていた。しかし、主たる流通が水運から陸運に移行した現在では、その役割を失い、海産物の需要減少や後継者不足等による漁業の衰退が地域社会の衰退に直結しかねない状態である。そこで本計画では青果市場と魚市場と加工場を統合し、さらに街の機能を付加したプログラムを挿入することで、市場を舞台とした生産者と消費者、地域のあらゆる世代の交流の場を創出する。朝日が昇る頃、漁師さんが漁から帰り、選別作業がはじまる。昼には、農家さんが朝獲った野菜を並べ、夕暮れ時になるにつれ市場が活気づき、消費者が見守る中で夕せりが行われる。この土地の特産物の売買に纏わる行為がエンターテインメント化され、生き生きとした浜の風景がこの屋根下空間に再び広がっていくことを期待する。



section elevation 1/1000

Inbound Paradigm Shift

—Five Star Resort—

スチレンボード、バルサ材
w1200×d800×h250mm
w800×d1400×h300mm

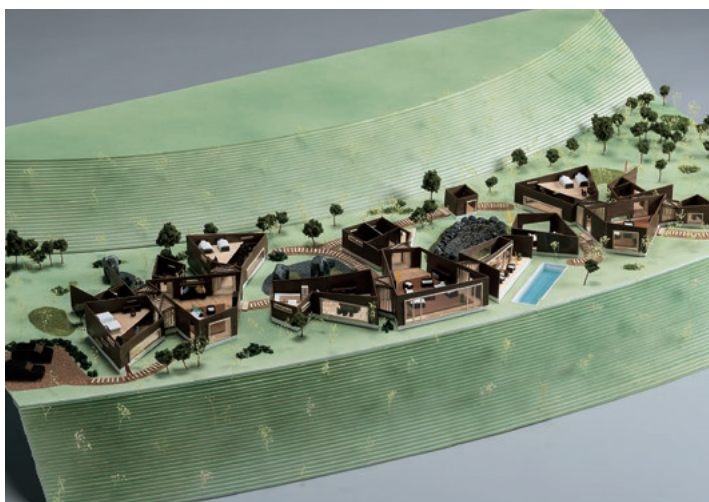
田淵 泰斗

造形建築科学コース

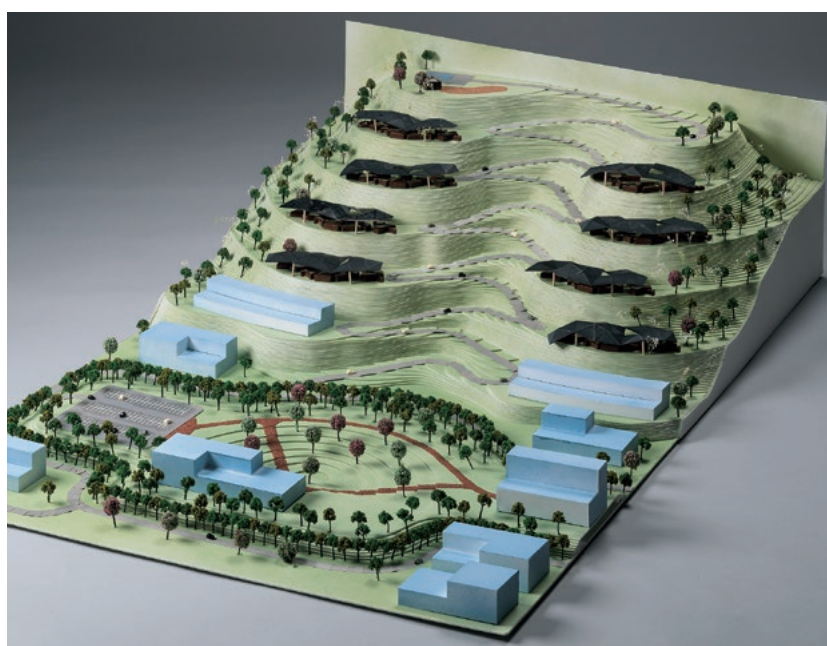
日本で、和を感じられる高級リゾートを開発し欧米から上客を誘致することで日本経済の発展を目指し、それらを地方で行うことの可能性を提示する。

国の観光収入を上げるためには欧米の上客を日本に長期滞在させることが必要であり、外国人観光客を長期滞在させるため、人間が退屈しない空間を造ることに挑戦した。

日本を訪れた外国人観光客が、和の空間を感じた時、最初は非日常的な一種の興奮を感じるが長期間そこに滞在し、その感覚が日常的になった時、和の空間は落ち着きや安らぎの感覚を与えるものとなる。この他にも、周囲の環境や空間の変化によって、旅行者が退屈することなく長期滞在できる空間を提案する。



リゾート施設内で最高級ランクの宿泊施設、一家族用
1/100 模型



リゾート施設全体俯瞰写真
1/500 模型

現代日本の建築家の模型表現に関する基礎的研究

高橋 愛花
造形建築科学コース

1. 序

建築における竣工建物以外の資料として図面や写真、模型などの建築資料の重要度が近年高まっている¹⁾。その中でも、模型は建築の立体的特性を、視覚を通じて速やかに伝達でき、建築専門以外の人にとってわかりやすいことから、次世代に建築文化を継承するうえで有効なアーカイブであると考えられる。また、模型は竣工建物に忠実なものもあれば、部位や部材を抽象化したり省略したり、異なる採色を施したりするものもあり、実物の建物を分析することでは得られない建築家の表現特性を捉えることも可能であると考えられる。そこで本研究では、模型表現の基礎的研究として、現代の日本の建築家の実物の模型を資料対象²⁾とし、その模型表現の傾向の一端を明らかにすることを目的とする。

2. 表現模型と再現模型

2.1 模型の切り分け 建築模型には、竣工建物の完成時の姿を見せるため建物を忠実に再現する模型(以下、再現模型)と、竣工模型と差異があり、再現とは異なる表現をした模型(以下、表現模型)に大別できる(図1)。全資料136個の模型を分類すると、表現模型が99個、再現模型が37個みられた。このとき分類する際、竣工建物と比較するのは建物部分のみとした。

2.2 模型の制作範囲 模型は制作されている範囲がそれぞれ異なるため、模型の制作範囲を内部、建物、外構、周辺の4つに区別し、どの区分まで制作しているかにより分類した(表1)。その結果、制作範囲では外構、周辺まで作られている模型が多くみられた。

3. 表現模型について

表現模型における竣工建物との差異を「色」と「形」という二つの水準でとらえる(図2)。全ての表現模型99作品をさらに分類すると、形の表現模型が29作品、色の表現模型が27作品、色と形の表現模型が43作品みられた。また、その差異がみられた建築部位を図3のように分類して分析する。

3.1 形の表現 竣工建物と模型を比較したとき、差異が形に表れている模型を形の表現模型とし、形の変化が建物のどの部材に表れているかを分析した(表2)。次に模型ごとに形の表現を分析すると、垂直材のみに表れたものが13作品、水平材のみに表れたものが27作品、垂直材と水平材両方に表れたものが19作品みられた(図4)。

3.2 色の表現 竣工建物と模型を比較したとき、差異が色に表



図1 表現模型と再現模型の切り分け

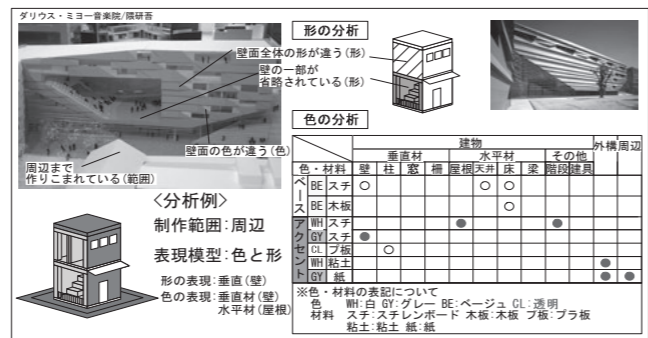


図2 分析例

表1 模型の制作範囲

	内部	建物	外構	周辺
内部	○	○	○	○
建物		○	○	○
外構			○	○
周辺				○

/や0は、表現模型の資料数/再現模型の資料数(各制作範囲ごとの資料数)の順番に表している。また、内部と建物は、外装の有無で分類している。

壁	垂直材				水平材				その他	
	柱	開口部	欄	屋根	床	天井	梁	階段	その他	
壁	柱	開口部	欄	屋根	床	天井	梁	階段	その他	

図3 表現がみられる建築部位

表2 建築部位ごとの形の表現

建築部位	垂直材				水平材				その他	
	壁	柱	開口部	欄	屋根	天井	床	梁	階段	建具
	24	12	11	7	39	34	10	14	4	5

形の表現がある模型	垂直材のみ	水平材のみ	垂直材・水平材両方
72個	13個	27個	19個
分析した模型			
59個			
構造模型			
13個			

図4 模型ごとの形の表現

表3 建築部位ごとの色の表現

建築部位	垂直材				水平材				その他	
	壁	柱	開口部	欄	屋根	天井	床	梁	階段	建具
	32	16	4	4	28	20	20	12	10	5

表4 模型ごとの色の表現の分類(外構・周辺におけるACの有無に形の表現の有無を付記)

外構・周辺にACなし	なし (18)	垂直材のみ (8)	水平材のみ (8)	垂直材・水平材両方 (27)
	形の表現なし	(4)	(1)	(1)
形の表現あり	(4)	(0)	(2)	(3)
合計	4/4(8)	1/0(1)	1/2(3)	4/3(7)
外構・周辺にACあり	(4)	(4)	(3)	(6)
形の表現なし	(4)	(4)	(2)	(14)
形の表現あり	(6)	(3)	(5)	(14)
合計	4/6(10)	4/3(7)	3/2(5)	6/14(20)

色の表現のみの資料数/色と形の表現の資料数(各資料の総数)の順番に表している。表中の垂直、水平等の文字と数値は形の表現の分類の資料数のこと

れている模型を色の表現模型として捉え、その模型に使用されている材料と色に着目する。まず使用されている材料と色を列挙し、さらにその中で材料と色がどの建築部位(図3)、またはどの外構、周辺の部分に用いられているかを分析した(図2)。列挙した色の中から、模型のベースとなる色を設定し、ベースカラー以外の色(アクセントカラー、以下AC)がどの建築部位に使われているかを分析した(表3)。次に模型ごとに、表現の見られた建築部位の組み合わせと、外構・周辺におけるACの有無という2つの水準で分類した結果(表4)、その中で数が多くみられた6つを類型として抽出した(類型A~F)³⁾。

3.3 色と形 表4の外構・周辺におけるACの有無の水準に形の表現の有無を付記したところ、外構・周辺にACを用いないものは、形の表現では、水平もしくは垂直要素のどちらかを省略して表現するものが多くみられた。一方、外構・周辺にACを用いるものは、形の表現では、水平・垂直要素の双方を省略して表現するものが多くみられた。

4. 結

本研究では、建築模型を再現模型と表現模型に分類し、表現模型を形と色という2つの水準で分析した。その結果、アクセントとなる色

の用い方により、建物と外構・周辺の対応関係を示す6つの類型を見出した。

註

- 平成23年2月、我が国における近現代建築家により生み出された図面や模型等の資料について流出や毀損に瀕するものが少なくないとして文化庁は、「国立近代建築資料館」を早急に整備することとした。
- 日本の著名な建築家が自ら選定した建築模型を保存・展示する「建築倉庫」(2016年6月オープン)は、国内唯一の建築模型展示施設である。本研究では、「建築倉庫」に収蔵された模型253作品のうち、実際に竣工された136作品を資料対象としている。紙面の模型写真ではなく実物の模型を多角的な視点から直に分析できることは、模型の分析において重要であると考え、対象となる資料数は少ないが、模型表現の基礎的研究として意義があるといえる。
- 類型Aは、建物にも外構・周辺にもアクセントとなる色を用いないもので、建物の内外を同等に扱うことで、周辺環境に同調する建築の在り方を表現していると考えられる。それに対し、類型Bは建物の水平要素と垂直要素の双方にだけアクセントとなる色を用いるもので、建物自体を際立たせることで、外構・周辺から自立した建物の在り方を表現していると考えられる。類型Dは建物の垂直要素と外構・周辺にアクセントとなる色を用いるもので、壁や柱といった建築部位と外構・周辺の特定の要素との対応関係を表現していると考えられる。同様に、類型Eは建物の水平要素と外構・周辺にアクセントとなる色を用いるもので、床、天井、屋根などといった建築部位と外構・周辺の特定の要素との対応関係を表現していると考えられる。類型Fは建物の垂直要素と水平要素と外構・周辺にアクセントとなる色を用いるもので、類型D、Eと比べより積極的に外構・周辺の特定の要素との対応関係を表現していると考えられる。

周囲の景観と呼応する切妻屋根群 —交通ターミナルと学童保育施設を有する 複合施設の提案—

図面・模型

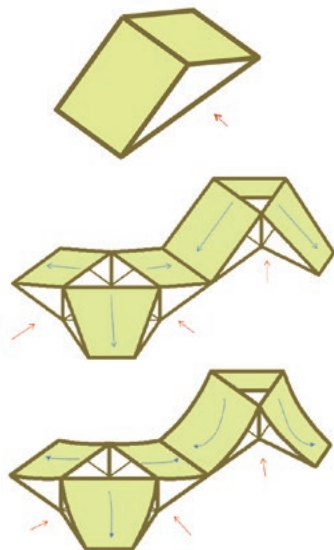
神崎 遥奈
造形建築科学コース

海、新湊大橋、遠景に立山が一望できる魅力的なロケーションでを有する万葉線終着駅の越ノ潟駅は、対岸へと繋がるフェリー発着場に隣接し、住民の小さな公共交通ネットワークとなっているが、現状は人の気配があまりなく、その利用者も減少の一途をたどっている。

そこで本計画では、住民の公共交通機関の利用促進の為に、パークオンライド型交通ターミナルに、学童保育施設や魅力的なウォーターフロント型商業施設等を併設する複合施設を提案する。具体的には、施設周辺及び万葉線沿線の校区を対象とした既存の学童保育施設の時間外保育に対応することで親子での公共交通利用を促す。また、周囲と呼応しながら、人々を多方向から引き込む建築形態により、ダイナミックに空間が展開しながら施設のどの場所からでも魅力的な景観を存分に満喫できるよう計画した。



トッplerフのダイアグラム



切妻屋根の妻面には、方向性と正面性がある。

三角の面から三方向に延びる屋根を連ねることで、多方向に展開する複合型の切妻形状となる。

更に、屋根をカテナリー曲面にすることによって、曲面の方向に流動性を与えた。



Switch

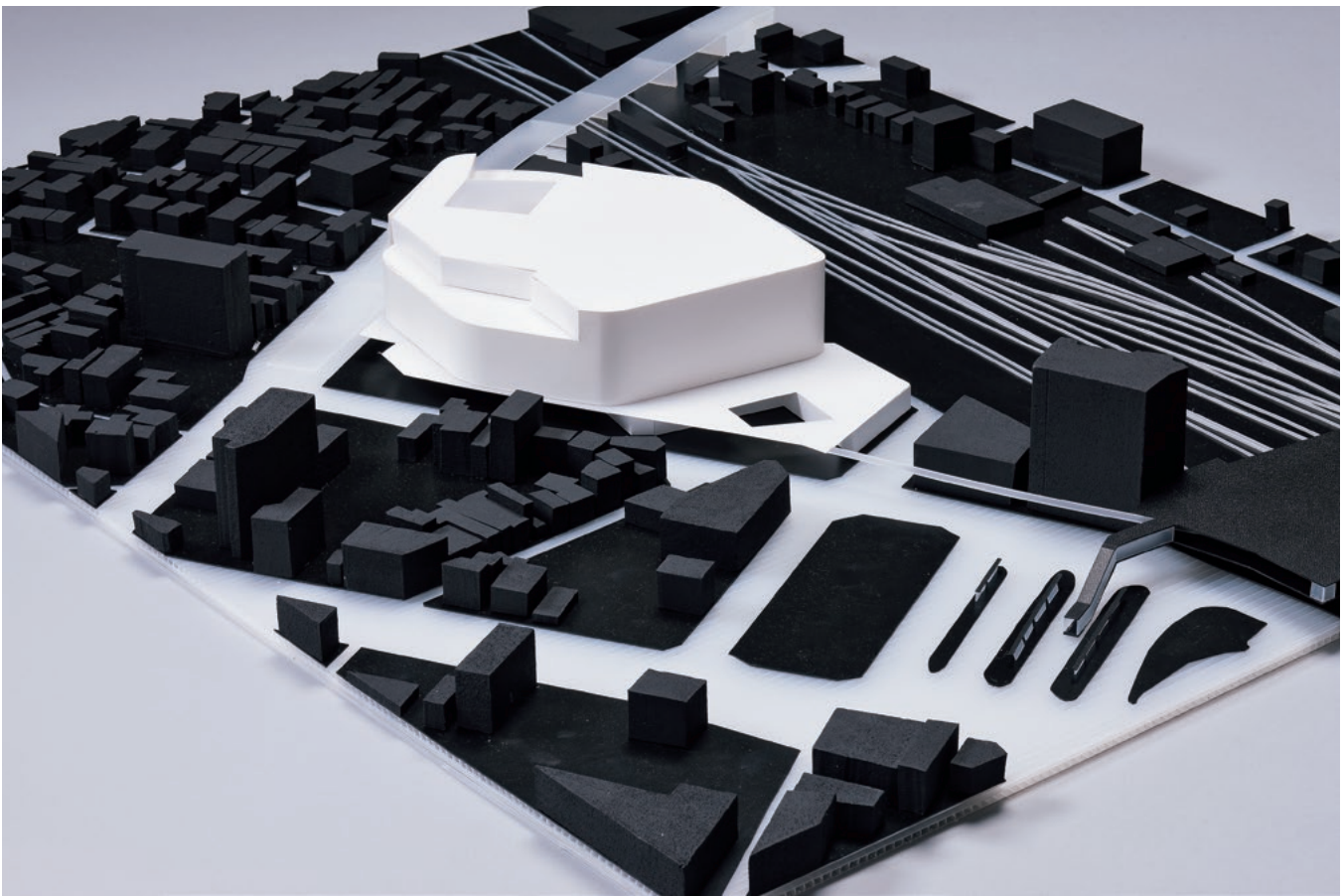
一防災拠点となりうる複合娯楽施設の提案—

図面・模型

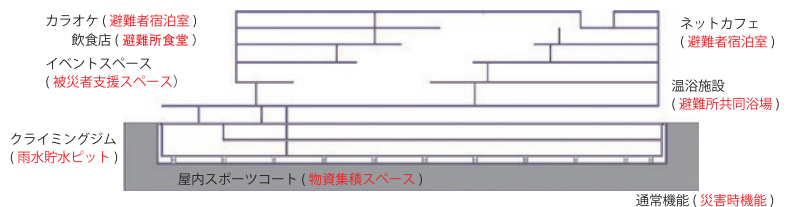
黒川 朋香

造形建築科学コース

近年全国各地で災害が頻発し防災への意識が高まってはいるものの、いざ災害が発生すると被災者は十分とは言えない設備の避難所で長期間の避難生活を強いられる場合が多い。また、災害を想定して作られた施設は通常の利用頻度が著しく低い。そこで本計画では、災害時には被災者を受け入れる防災拠点として充実した機能を備えながら、通常時にも十分利用可能な複合娯楽施設を提案する。災害時には娯楽施設の機能の一部をスイッチさせることで避難生活を送る場へと即座に対応し、避難者は既存の娯楽も享受できることによってストレスや不安を解消しメンタルケアに貢献する。さらに、本施設が近隣の避難所・防災施設と連携し、地域の災害ネットワークの中核を担うことで、被災者の物心両面のケアを行い、被災地域全体の避難生活の質を向上させる。



ペDESTリアンデッキ



▲ Section: 各階の様子が確認できる斜めにずれた吹き抜け。災害時の素早い状況把握や情報共有ができることにより、避難者の不安や混乱を減らし管理・運営がしやすくなる。

◀Site: 高岡駅前

大通りに面し、様々な交通機関でのアクセスを容易とする。さらにペDESTリアンデッキにより高岡駅の改札レベルと計画建物の2階を直結する。

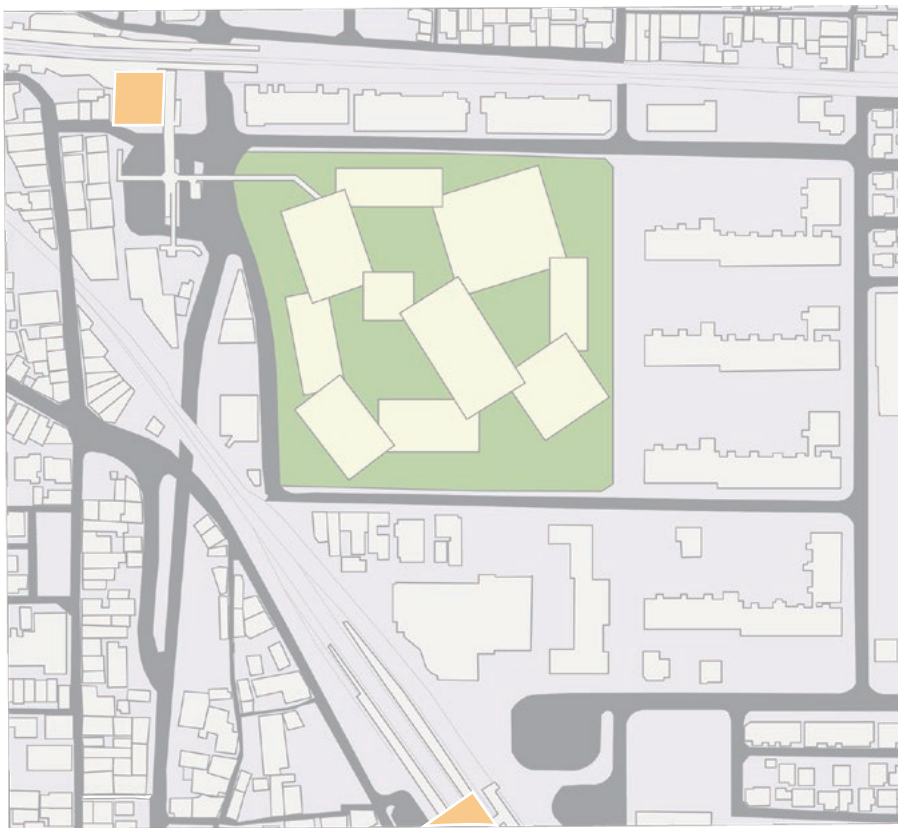
積層する内外

一福祉施設及び多世代交流空間を
主とした複合施設の提案一

図面・模型

平已 陽穂
造形建築科学コース

超高齢社会に突入し、高齢化率は26%を超えた。しかし、健康寿命は平均寿命に比べ伸びが小さく、65歳以上の要介護者等数は急速に増加している。これに伴い、老老介護や施設における介護者等への対応など、介護に関する社会問題が浮き彫りとなっている。そこで健康的・文化的に過ごすことを目的とした施設やサービスにより、高齢者自身の意識を高め、将来的に介護サービス等を必要とすることのない高齢者層の増加を目指す施設を設計する。分棟を角で接しながら配置し建物全体に回遊性をもたせ、また階高に変化をつけることで勾配の異なるスロープ・階段を各所に設置した。回遊性と勾配を持つ様々なルートを、いくつものサービス・空間をつなぐ動線とすることで、高齢者が施設を利用しながら介護予防としての適度な運動を促す。これからの未来、誰もが必ず直面する老いという現実。それをポジティブに捉え、今できることを実践していくための、そして、最期まで魅力的な自分であるための施設・空間を提案する。



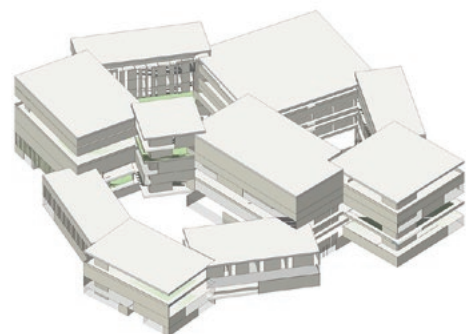
◁配置図

周辺一帯は住宅に囲まれ、
店舗は少ない。
徒歩5分圏内に2つの駅があり、
北側の駅とはデッキにつながる。
市内の人々の公共交通の要所である。



◁人・物の動きの想定

▽完成イメージ



Green Hill Nursery School

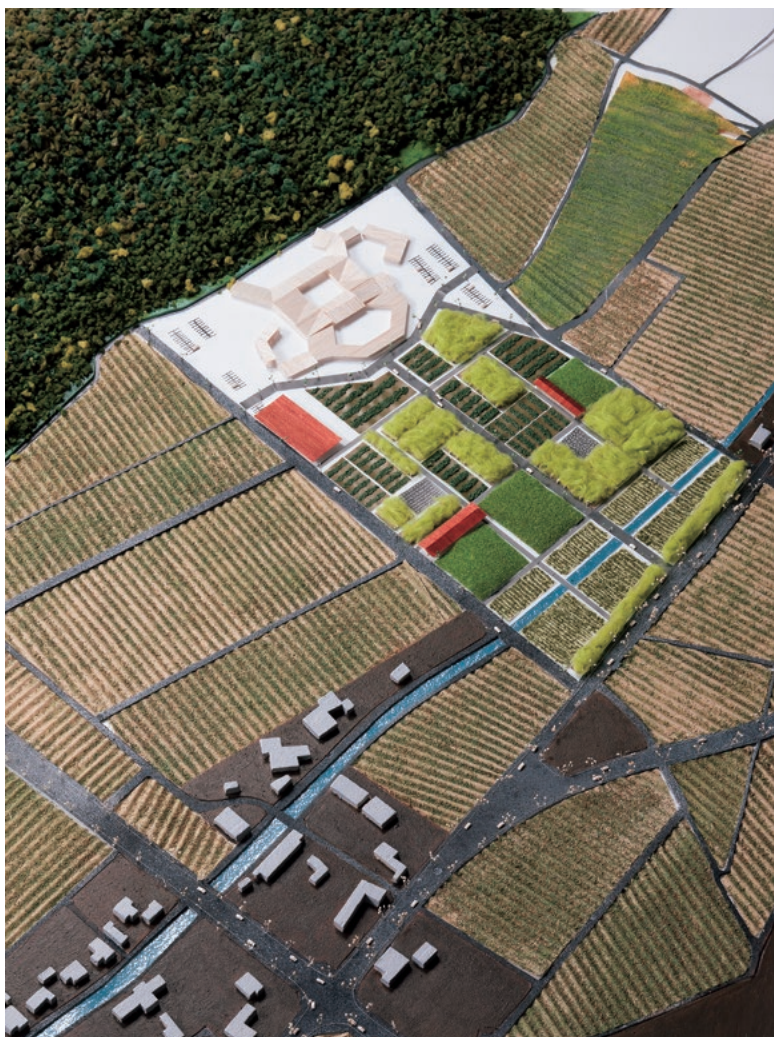
—農場と小児科を併設する保育園の提案—

図面、模型

呉 瑛

造形建築科学コース

保育園は子どもを預ける機能だけではない。子どもにとって一日の生活を養護、教育する場であり、保護者にとっては子育て支援、就労支援を果たす場でもある。しかし、現状の保育園の問題点として①病気にかかりやすい子どもの急な体調不良に対し、その度に仕事を中断して保護者が対応せざるを得ないこと、②園内では園児に野外活動を十分に経験させられないため、園外保育で対応せざるえないことが挙げられる。そこで、緑豊かで広々とした丘陵地形である呉羽山の麓に農場と小児科を併設した多機能型保育施設を提案する。山と平地の境目に様々な外部空間を内包するように保育園を配置し、保育園を架け橋として、高低差のある内外空間を自由に行き来できるようにすることで、園児が様々な場面で自然環境を体感できるようにする。さらに、保健室と小児科病院との連携を高めることで、親を呼び出すことなく体調不良の子供に対処し、かつ感染症などの予防対策も徹底できる。このような保育園の機能の充実、幼児の健全な発達と子育て支援や少子化対策に寄与すると考える。



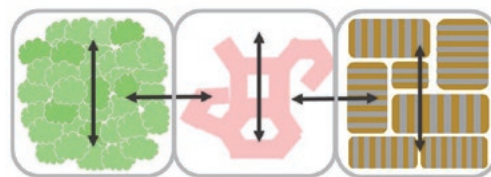
鳥瞰図



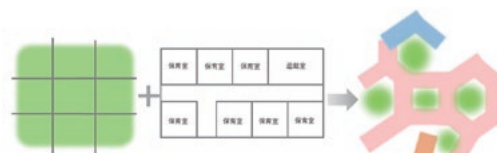
ダイアグラム



小児科、農場、保育園の併設



山と農場の架け橋となる建築



自然と連動した多様な外部空間を内包した建物ボリューム

都市におけるこれからの 食品スーパーマーケットの提案

模型・図面

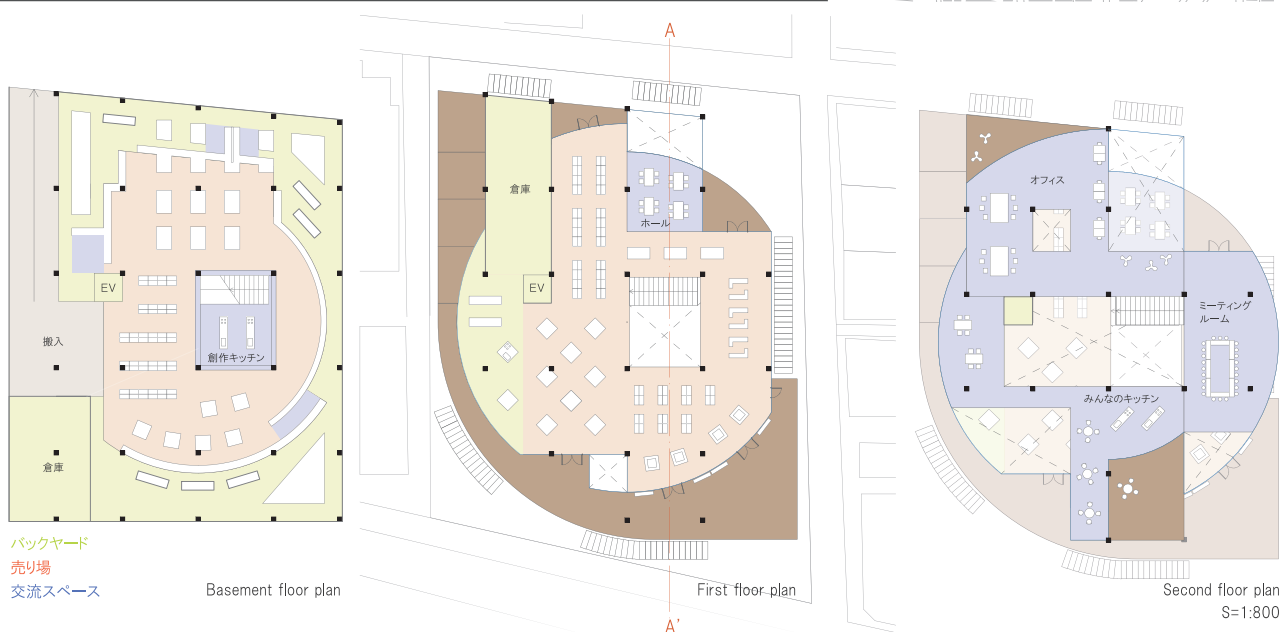
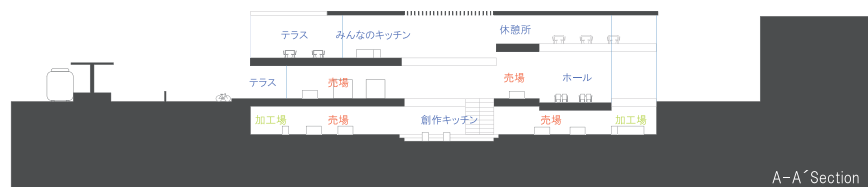
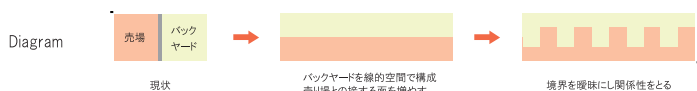
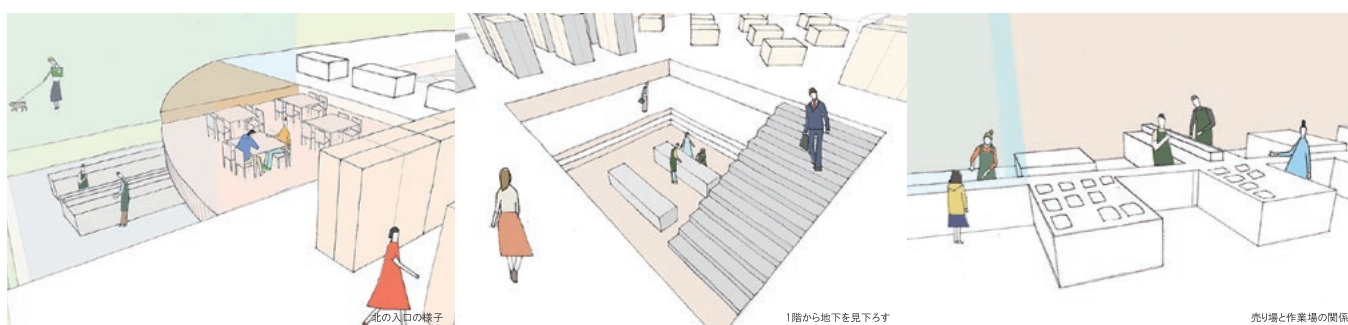
新家 佐和子

Araie, Sawako

造形建築科学コース

近年、独居老人の孤独死など地域コミュニティの衰退が問題となっており、地縁型コミュニティが希薄な都市部は、より深刻な状況にある。また、食品偽装や杜撰な食品管理により、食の安全性が脅かされ、消費者の食への意識が高まっている。

そこで本計画では、商圏に限られたスーパーマーケットを核として、利用者が自ら管理・運営を行いながら、食をテーマに互いに交流することで、地縁型に近いテーマ型コミュニティを形成することを目的とする。具体的には、バックヤードを線的な空間で構成し売り場と接する面を増やし、曖昧で多様な境界を作ることで、バックヤードと売り場との新たな関係性を築く。そうすることで、消費者・店員・生産者の普段関わることのない人々同士の交流を生み出す。



アクティビティと建築の部位の 関係性によって構築された学びの場 —富山工業高校の再建—

図面・模型

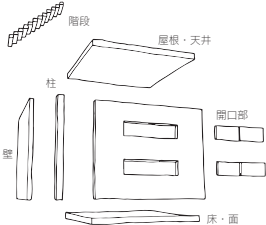
鬼塚 来未
Onizuka, Kurumi
造形建築科学コース

従来の設計プロセスでは、周辺環境やプログラムへの対応を前提として進めることで、建築の機能性や効率性が担保されているが、それら一辺倒では、出来上がったスペースが必ずしも人々にとって居心地の良い場所になるとはいえない。

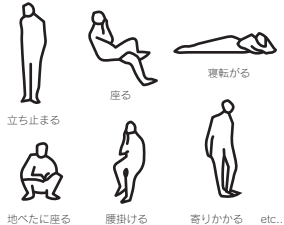
私たちは柱や壁があれば寄りかかり、段差があれば腰掛けるというように、物理的な環境を構築する単独あるいは複数の部位がきっかけとなって、行動をおこすこともある。そうしたアクティビティと建築的要素の関係から、アクティビティに寄り添う様に設計を進める事で、機能性や効率性が著しく損なう事なく、常に人々の生き生きとしたアクティビティで溢れる建築をつくりだすことが本計画の目的である。

具体的には、富山工業高校の改築プロジェクトを想定し、柱、壁、屋根などの建築的部と、学校の中で起こりうるアクティビティの関係性を分析し、その関係性から、部位の組み合わせによって場を生成し、学校全体を構成していくボトムアップによる建築設計を試みた。

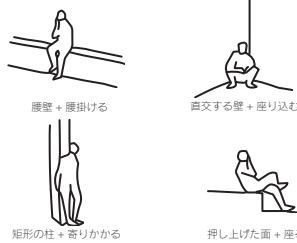
ダイアグラム1. 建築を部位に分解



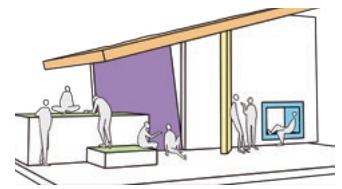
ダイアグラム2. 学校で起こるアクティビティの列挙



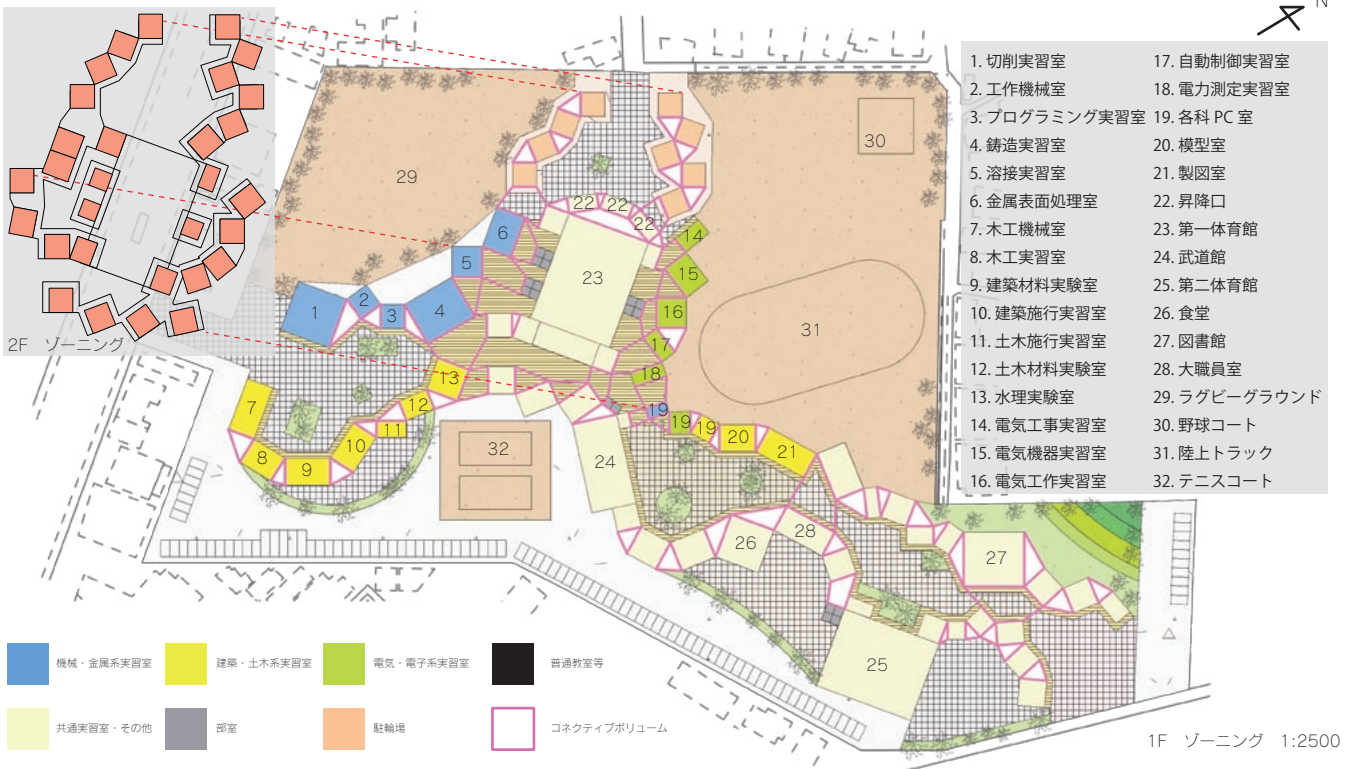
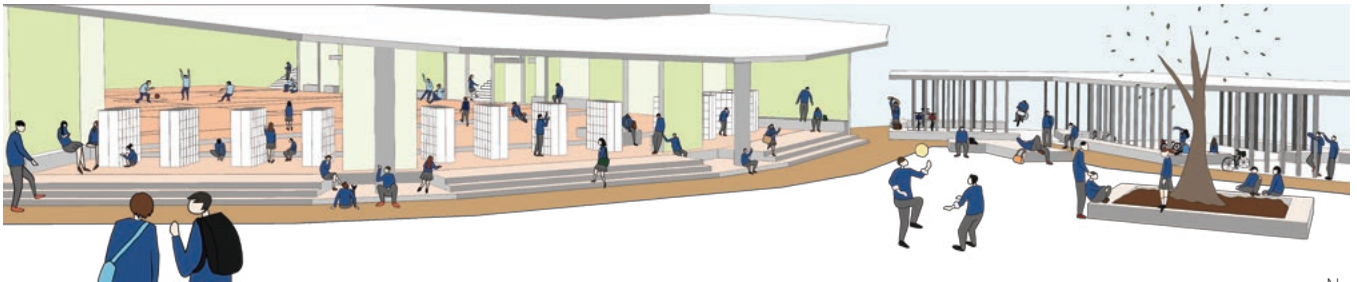
ダイアグラム3. 建築の部位とアクティビティの関係性



ダイアグラム4. 建築の部位とアクティビティの関係性から場を生成



イメージパース



時をつむぐ

一保育施設を有する高齢者集合住宅の提案一

図面・模型

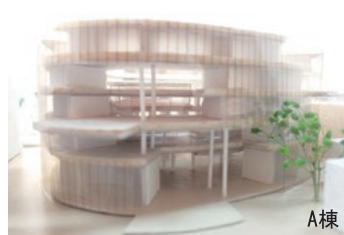
田村 桃子

Tamura, Momoko

造形建築科学コース

路面電車の整備が整いコンパクトシティとして注目されている富山市では、近年のタワー型集合住宅の建設により、街中居住は増えているが、その高層部は周囲の景観を損ねたり、街との関係が希薄になりがちである。また、多くの市民は移動手段に車に依存しており、中心市街地の駐車場も年々増加しているのが現状である。

そこで本計画では、今後ますます深刻化する少子高齢化社会を見据え、駐車場などの低未利用地に、保育園と高齢者用集合住宅の複合施設を、街と密接に関係を築ける中低層建築として計画する。具体的には、子どもと高齢者の1日の行動動線を元に共有スペースを配置し、レベルの違う床、開口を有する壁などを用いることで、連続する空間を緩やかに分離し、互いのアクティビティが交差するように構成した。加えて、道路をまたいで施設を繋ぐことで、公共空間と施設の関係曖昧にし、さらに入口となる部分に公共スペースや広場を配置することで、地域に開けた街の憩いの場を作り出している。



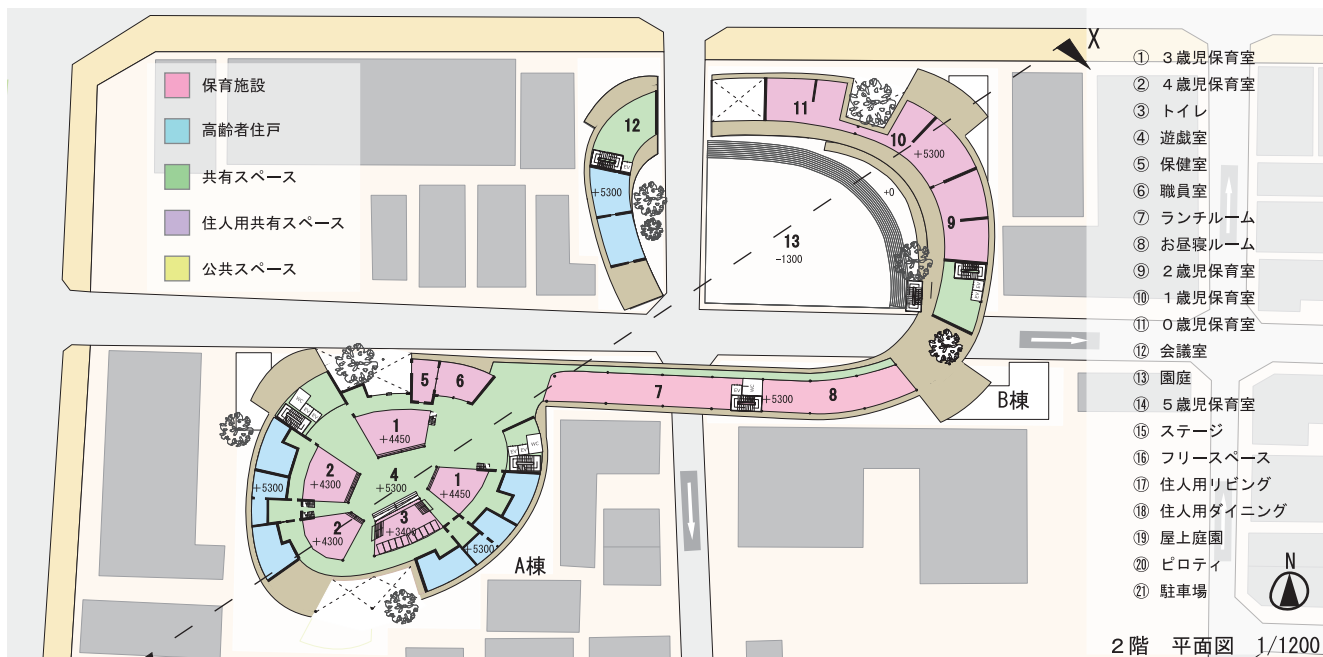
A棟



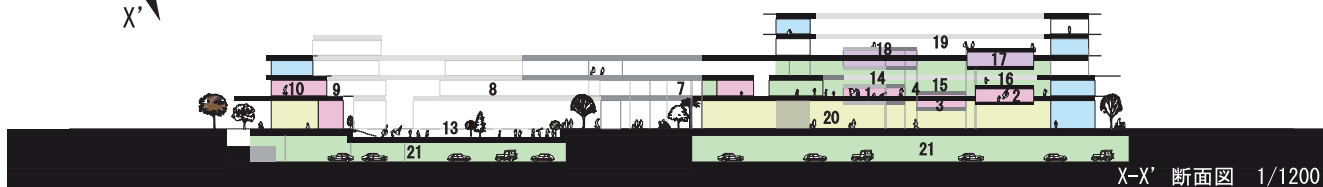
B棟



鳥瞰図



2階 平面図 1/1200



X-X' 断面図 1/1200

通りの風景の再編

一富山市街地における子ども施設を用いた
街並み形成一

図面・模型

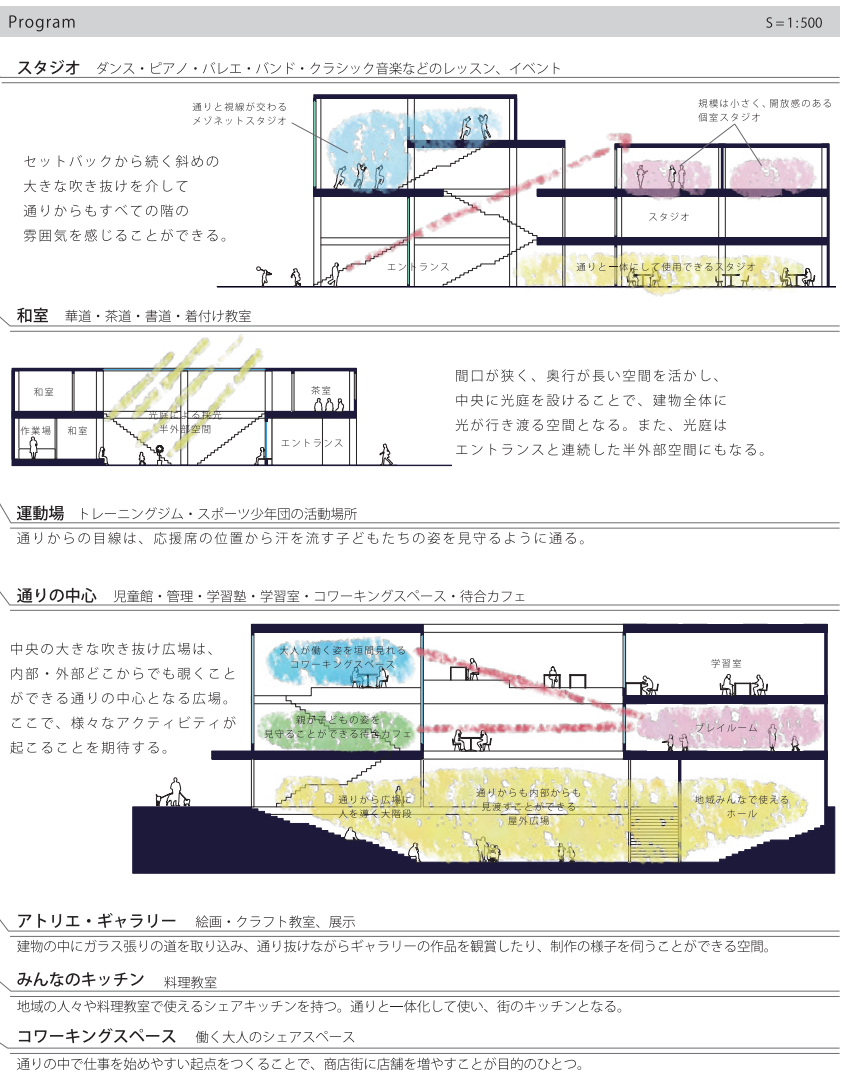
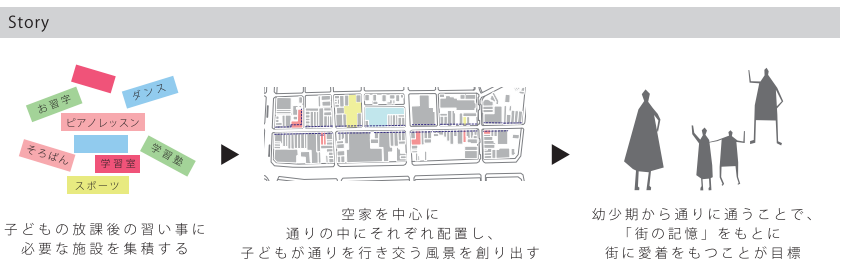
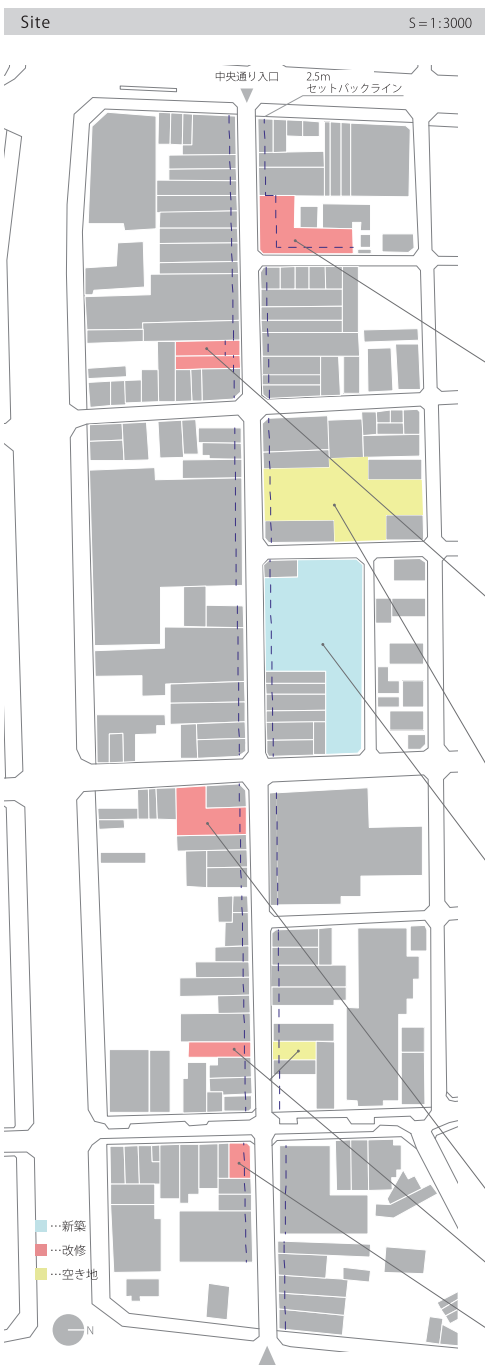
渡邊 聡美

Watanabe, Satomi

造形建築科学コース

かつては県内で最もにぎわいのある商店街であった富山県富山市中心部に位置する中央通り商店街は、空店舗の増加によって、商店組合が機能せず、アーケードの維持や管理も厳しい状況である。また、全天候型への対応としてのアーケードは、大型ショッピングセンターの台頭により、その優位性が失われ、雨風を部分的に凌ぐことが可能であれば、アーケードを取り払い、再び通りに空と街並みを取り戻した商店街の事例も見られるようになってきている。

そこで、本計画では、アーケードの撤廃後を仮定し、空き家の改修を中心に、子どもの放課後を包括する施設群を設け、通りに子どもが行き交う風景を創り出すことを目的とする。具体的には、改修の各店舗の1階部分をセットバックすることで、通りと内部の新たな関係をつくることや、いままでアーケードで分断されていた上下の関係を活性化させるファサードを計画する。今後、中央通り商店街への愛着を持つ人が増え、街の循環性を生み出すことを目標とする。



新湊地区・内川沿いにおける 小規模建築の集積による まちづくりの提案

図面・模型

紺井 優希

Koni, Yuki

造形建築科学コース

富山県射水市の新湊地区・内川沿いは、漁師町の雰囲気が残る町並みがある。川の駅や特徴のある橋の整備により観光資源の価値を高める試みは行われているが、人口減少・少子高齢化に伴い、周辺は空き家や空き倉庫などが増えるばかりで、内川全体の景観は保全されないままである。

そこで、本計画では、点在する内川沿いの空き家をコンバージョンして、新しいアクティビティをその建物の前の親水スペースと一体的に計画することで、内川を軸として景観を修景し、街を活性化することを目的とする。また、内川は現在も漁業の拠点として船の停泊場所として使われているため、新設する親水スペースは、可動式とし、必要に応じて移動したり組み合わせたりするなど、フレキシブルで多様な使い方ができるものとする。



漁師の作業場



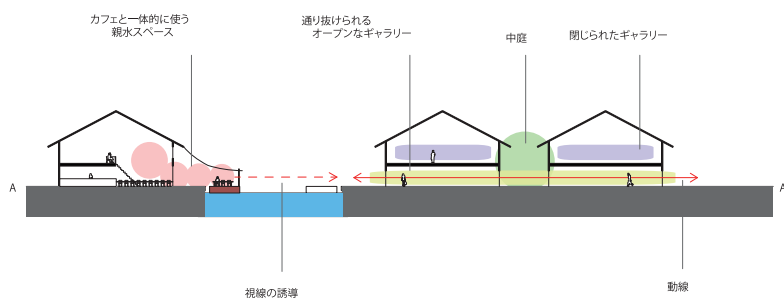
アイレより内川を見る



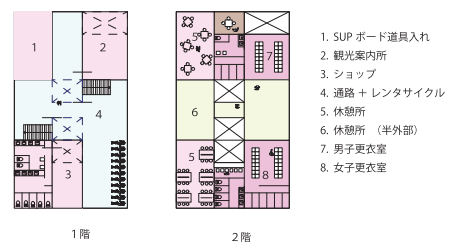
橋より内川を見る



対象敷地 1:2000



機能と親水スペースの関係例 1:1000



体験施設プラン 1:1000

果樹のための建築

一長野県上田市における
果樹と建築の新しい在り方一

図面・模型

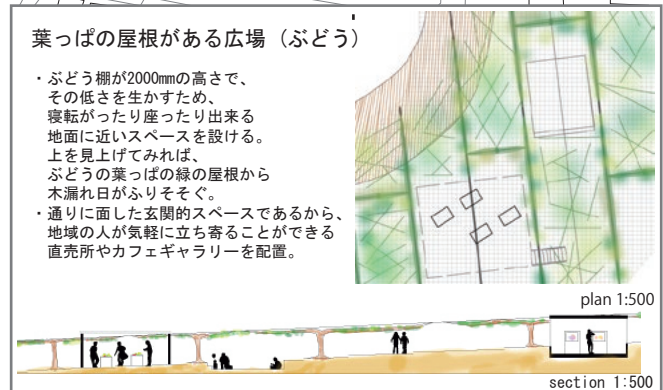
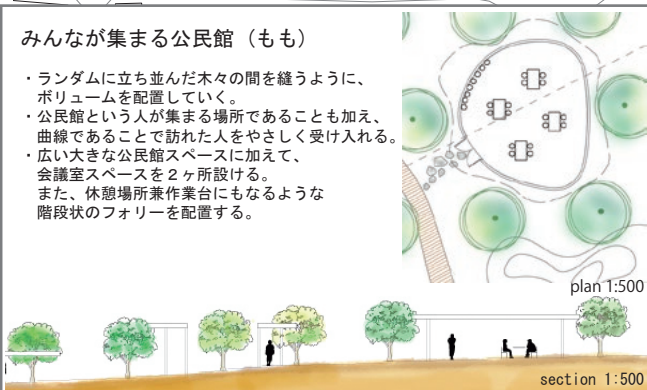
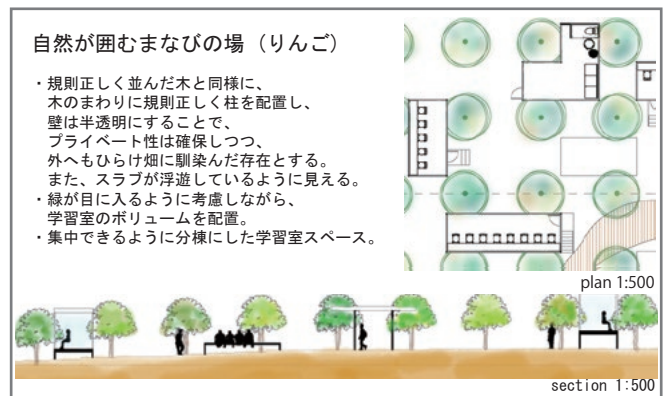
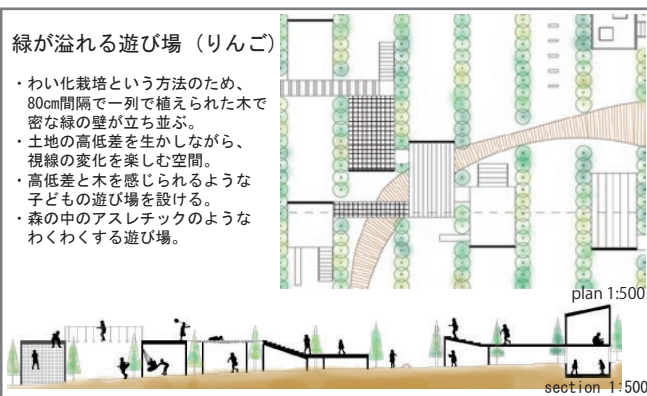
西澤 佳歩

Nishizawa, Kaho

造形建築科学コース

農業に対する先行きをより一層不透明にしている TPP の協定協議は、少子高齢化による農業従事者の減少や農家の後継者問題に拍車をかけている。長野県上田市も例外ではなく、後継者がいないことを理由に廃業に追い込まれる農家は年々増加している。中でも果樹園は、耕作面積が大きく、廃業した場合は、木々を切り倒した荒廃地となり、景観を著しく損なってしまうことが問題となっている。

そこで本計画では、住宅街のなかにある廃業予定の果樹畑を敷地として、植えられた果樹それぞれの特徴を活かしながら地域コミュニティ施設を計画することで、自然や果樹との触れ合いを通して、人々が交流し、地域の住民が一体となって景観を保持していくことを目的としている。さらに、果樹作業体験やそれらの加工体験の施設を多く設けることで、自然に親しみながら農業への関心を高める食育施設としても活用する。



鋳物語

一金屋町を事例とする
町の魅力向上のための研究と提案一

図面・模型

波多野 歩実

Hatano, Ayumi

造形建築科学コース

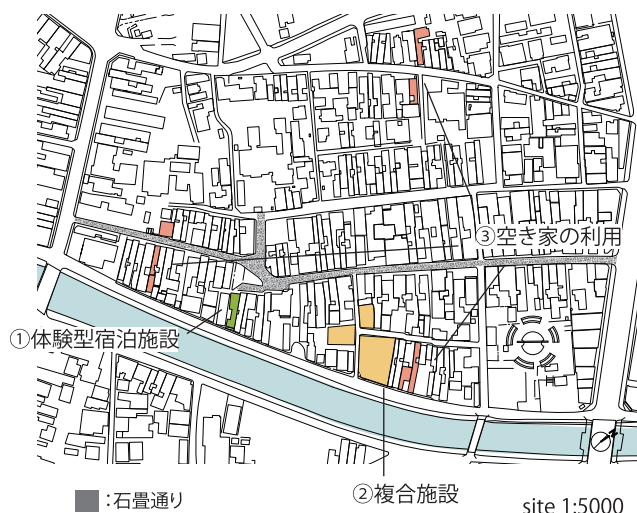
高岡市金屋町は、歴史ある町並みや鋳物文化など魅力溢れる町だが、空き家や高齢者の増加、鋳物職人の後継者不足など深刻な問題を抱えている。そこで本計画では、既存の空き地や空き家を活用し、3タイプの施設を町に挿入する事でそれらの問題を改善し、伝統を継承するコミュニティの礎を築く事を目的とする。

タイプ1、体験型宿泊施設：既存の空き家を改修し、地域住民と関わりながら、金屋町での暮らしを手軽にかつリアルに体験できる施設とすることで、新たな定住者の増加を促す。

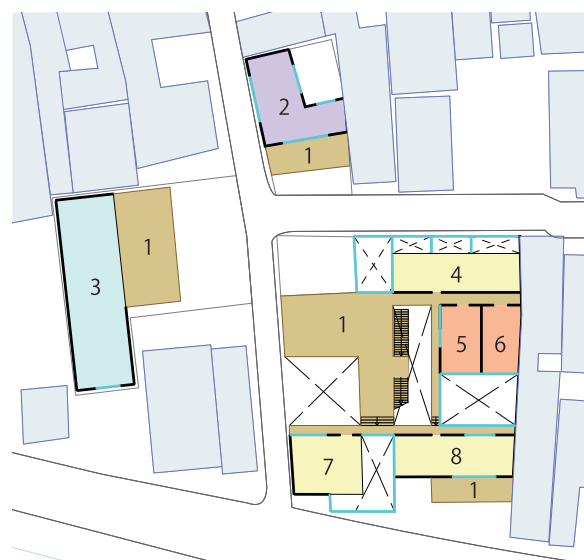
タイプ2、鋳物工房 × 公民館：既存の空き地を組み合わせ、作家や職人を志す若者や学生のために開かれた工房を設け、鋳物技術の伝承と革新的場を町に作り出す。また公民館の用途を入れ、住民と作家同士の交流を促進する。

タイプ3、新規定住者のための住居：既存の空き家を改修し、定住希望の作家が制作、展示、販売できる場をもち、町に開かれた住居を提案する。

町ににぎわいをもたらす3つの提案

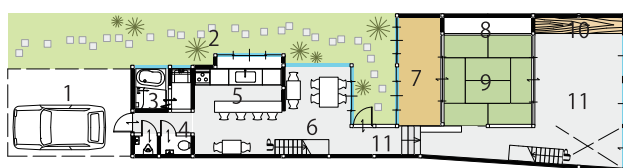


②複合施設 (工房×公民館)



①体験型宿泊施設

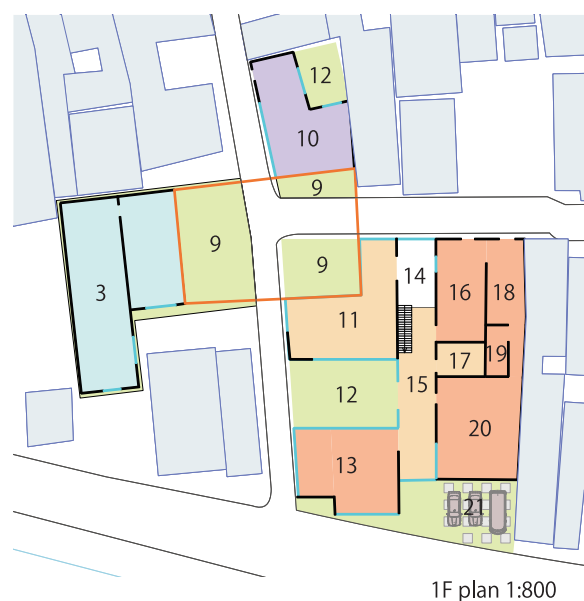
南北2か所ある玄関を通り土間でつなぎ、だれもが気軽に行き来できる1階部分。中庭から直接入ることもでき、様々な交流が生まれる。



1 駐車場 2 中庭 3 お風呂 4 トイレ 5 キッチン
6 カフェスペース 7 縁側 8 床の間 9 和室 10 展示棚 11 通り土間



土間や棚には作家たちの作品が展示され、ギャラリーとしても利用される



1 テラス 2 研修室 3 宿泊棟 4 会議室 5 処理室 6 検査室
7 デザイン室 8 図書室 9 みんなの広場 10 カフェ 11 体験工房
12 中庭 13 原型室 14 エントランス 15 共有庭 16 加工場
17 トイレ 18 着色場 19 ロッカールーム 20 鋳造場 21 駐車場

南部と北部の人々をつなぐ建築 —長野県立科町における市場を有する コミュニティセンターの提案—

図面・模型

大島 堅太

Oshima, Kenta

造形建築科学コース

長野県立科町は、様々な理由から”ひょうたん”のような特徴的な地形をしているため、南部と北部で地域差が大きく異なり、相互の意思疎通が上手くいかないということが、以前より懸念されてきた大きな問題である。加えて近年は少子化の影響もあり、より一層の南部と北部の関係性の希薄化が懸念される。

そこで人同士の関係の強化が地域同士の関係性の回復にもつながると考え、本計画では、”ひょうたん”のくびれに位置する町の中心部に南北間を関係付けさせるための建築を構築する。具体的には、図書館を主としたコミュニティセンターを置くことで、この町の図書サービスを補うだけでなく、誰もが気軽に利用できる場とし、さらに、市場を付加することで、南北間に元からあった”生産と消費の関係”を円滑化しながら、南北の人同士の関係性を強め、賑わいのある豊かな空間を創造する。これにより、本施設が新たな町の中心施設となり、町としての調和を図るものとして機能することを目指す。

Site



Tateshina

Site:Jinnai

今回の敷地は、長野県の東部に位置する立科町の中心部に当たる陣内地区の一角である。周囲には釣り堀施設がいくつかあるだけであとは全て森に囲まれた場所となっている。敷地特徴としては、えぐるように「大きくカーブした道」と20メートル以上もある「大きな高低差」が2大ポイントとして挙げられる。また、山と町を繋ぐ道がこれ一本ということもあり、1日のうちで必ず車が行き交いする場所でもある。それらのポイントを踏まえ計画を進めていく……

Perspective



Diagram

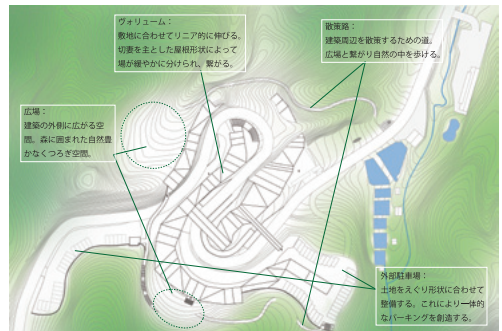


敷地から特徴を読み取り、道における大きなカーブに注目する。カーブに合わせて細長いリアヴォリュームを配置していくことで、外に対して開く面と内に対して集中する面との異なる空間を創造する。

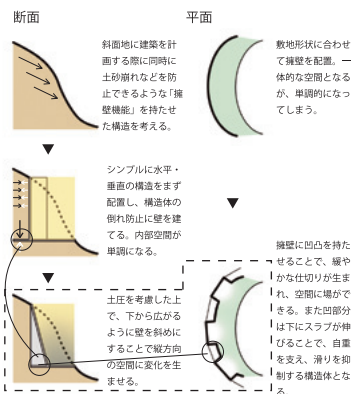


道を読み取り、ヴォリュームからの圧迫感を受けるところを後退させることで、圧迫を軽減させ気持ちの良い空間をつくっていく。またリアヴォリュームから突き出るようにヴォリュームを出し、それらを繋げていくことで、中心に主となるヴォリュームを構成する。それにより回遊性を創出させる。さらに突き出るヴォリュームは周辺要素に応じて振ることで、視覚的体験の多様性を生み出していく。

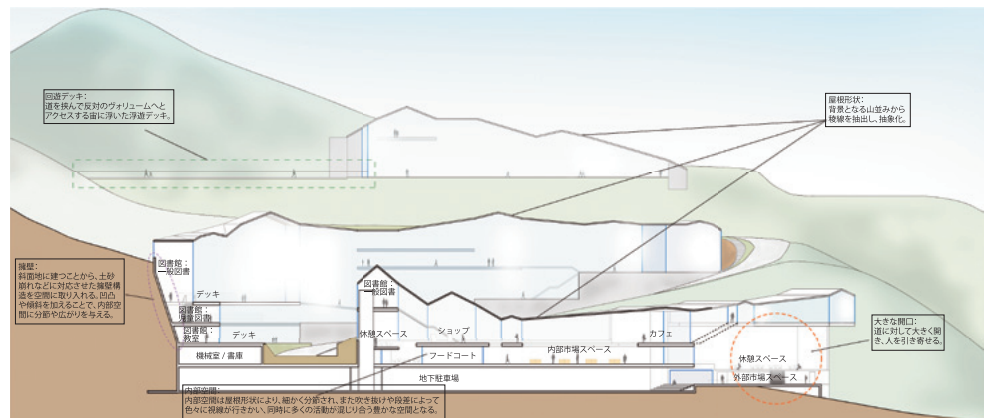
Plan _ Site plan



Structure _ Retaining wall



Section



海への誘い

—三国湊における小路の顕在化とその手法—

図面・模型

南坂 謙

Minamisaka, Ken

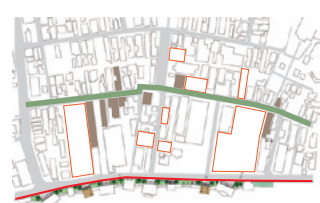
造形建築科学コース

三国町は、北前船が出入りする主要な湊町として繁栄した中世からの歴史を持つ町である。明治中期以降、湊は漁港となるなど、三国は海と共に暮らし、海の恩恵を受けて発展してきた。しかし近年、湊町三国の歴史・面影を残す町家の減少とともに、若年層の郊外への流出や高齢化などの進行によって、空き地や空家が増加し、三国の湊町らしい町並み景観が徐々に失われつつある。また、護岸のバラベットによって海との関係は希薄化し、まちから海を感じることはほとんどできない状況である。

そこで本計画では、唯一まちから海を感じさせるアイデンティティとなりうる通りと海を継ぐ小路や空き地に着目する。加えて、両者を結ぶ海岸沿いに建築的空間を点在させることによって、小路や空き地や海岸沿いをより魅力的な空間へと変換し、失われた三国の歴史的な町並みと海との関係を修復し、未来へと継承していく。

計画

現状



現在、多くの空き地（駐車場）が点在し、まちの空洞化が進行している。また、護岸道路沿いのバラベットにより、まちと海のつながりが希薄化している。
→ 三国湊の町並み景観が失われつつある

Site



- ・駐車場を一ヶ所に集約する。
- ・空いたスペースに周辺環境に合ったコミュニティ空間を設け下町通り、海へ抜ける小路を顕在化していくことで海と下町通りを関係付けていく。

- ・海に抜ける小路の先や部分的にバラベットを取り除くことによって海へのアクセス、眺望を確保。

- 下町通り
- 伝統的建物
- 駐車場
- バラベット
- ← 視線の抜け

① 博物館

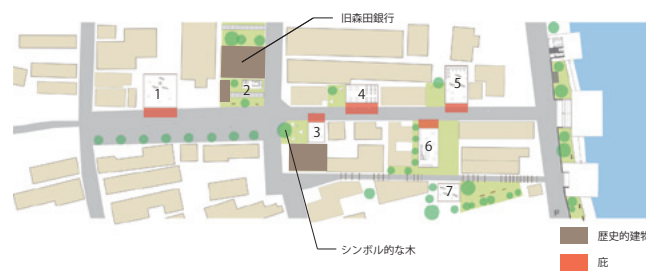
人々が活発に動く場所



1. エントランス
2. ホール
3. 展示室①
4. 展示室②
5. カフェ
6. 公民館
7. 多目的ホール
8. 中央広場
9. 野外ステージ

② メインストリート

特別な目的がなくても立ち寄れる憩いの場所

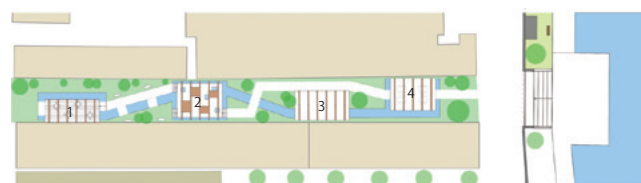


- ・昔からある大きな木が特徴的（木陰に人は集まる）
- ・小路の両端にある空き地にコミュニティ空間を配置
- ・小路に対して庇を伸ばすことで小路に半外部空間ができる
- 軒下空間が更なるアクティビティとコミュニティを発生させる

1. ギャラリー
2. まちかど広場
3. 談話スペース
4. 読書スペース
5. 販売スペース
6. カフェ
7. ギャラリー

③ 下新公園

まちと海とを繋ぐ親水公園



使われていなかった公園を、だれでも使えるように一般開放する。オープンデッキ、親水スペース、休憩スペースなどを設け、まちの住人、訪れた人が休みながらまちと海とを行き来する。

1. オープンデッキ
2. 親水スペース
3. 公衆トイレ
4. 喫煙スペース
4. 休憩スペース

人情味あふれる 屋根のあるまち

一松駅前商店街における
新しいアーケードの提案一

図面・模型

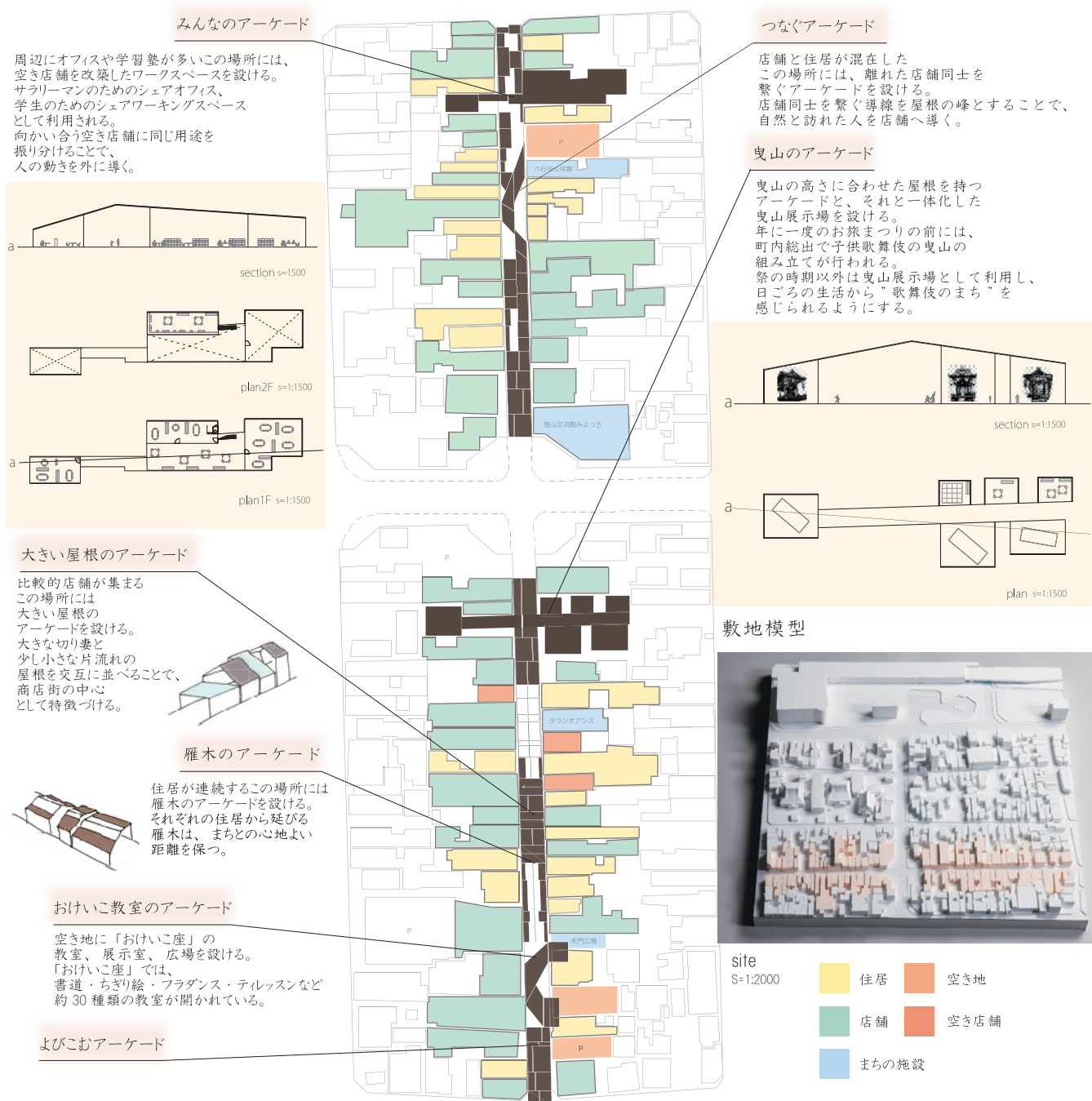
吉田 奈緒

Yoshita, Nao

造形建築科学コース

地方都市における駅を基点とした中心市街地の商店街は、ロードサイドの大規模小売店舗の出店により、空洞化している。敷地である石川県小松市の小松駅前商店街も閉店する店が連なりシャッター通りとなっている。かつて商店街では、日常の買い物を通して、近隣住民と店員がコミュニケーションをとることで、商店街ならではの人情の厚い地域コミュニティが築かれていた。高齢化社会が深刻化するなか、このような商店街ならではの地域コミュニティの在り方が再考されるべきである。

そこで本計画では、画一的な既存のアーケード空間を、スポットごとの特性に対応した細やかな屋根を連ねることで、コミュニケーションを促進する場が連鎖する通りとし、人情味あふれる商店街を再生することを目的とする。



衰退に伴い空洞化した中心市街地の商業地域における街区内の再構築 一権堂地区における街区型居住地域の提案一

図面・模型

金子 佳裕

Kaneko, Yoshihiro

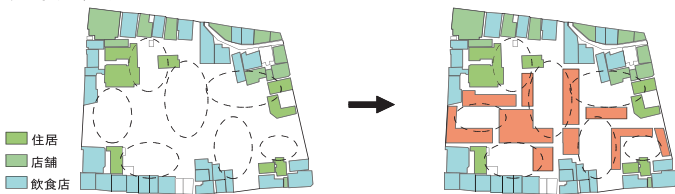
造形建築科学コース

現在の地方都市の中心市街地では、車社会の発達やロードサイドへの大型ショッピングセンターの進出などにより、商業施設や商店街の衰退が進んでいる。その衰退に伴い、空き家の増加、空き地・駐車場の増加、マンションの乱立などが、市街地の景観を乱す大きな要因となっている。特に今回の計画敷地に選定した長野市の権堂は、大型店舗の撤退が空き家問題と重なってしまったことで、街区の空洞化が顕著にみられる。

そこで本計画では、街区内に性格の異なる中庭空間と路地空間を、計画する集合住宅と既存建物で形成することで、中心市街地に豊かな居住環境を創出することを目的とする。

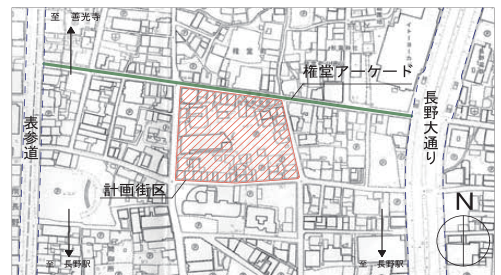
具体的には囲まれた諸室の機能により、その広場は特徴を付けられていく。そして、中庭空間の特徴を異なったものとし街区内に回遊性を付けていくことで、様々なアクティビティを体験し、住人のみだけでなく住人以外ともコミュニティを持つことができるよう計画する。

ダイアグラム

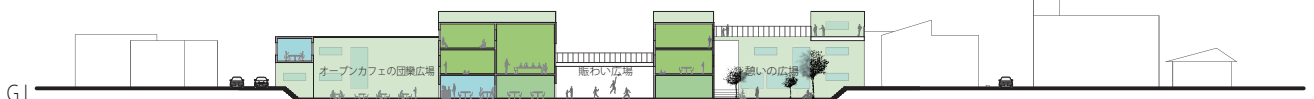
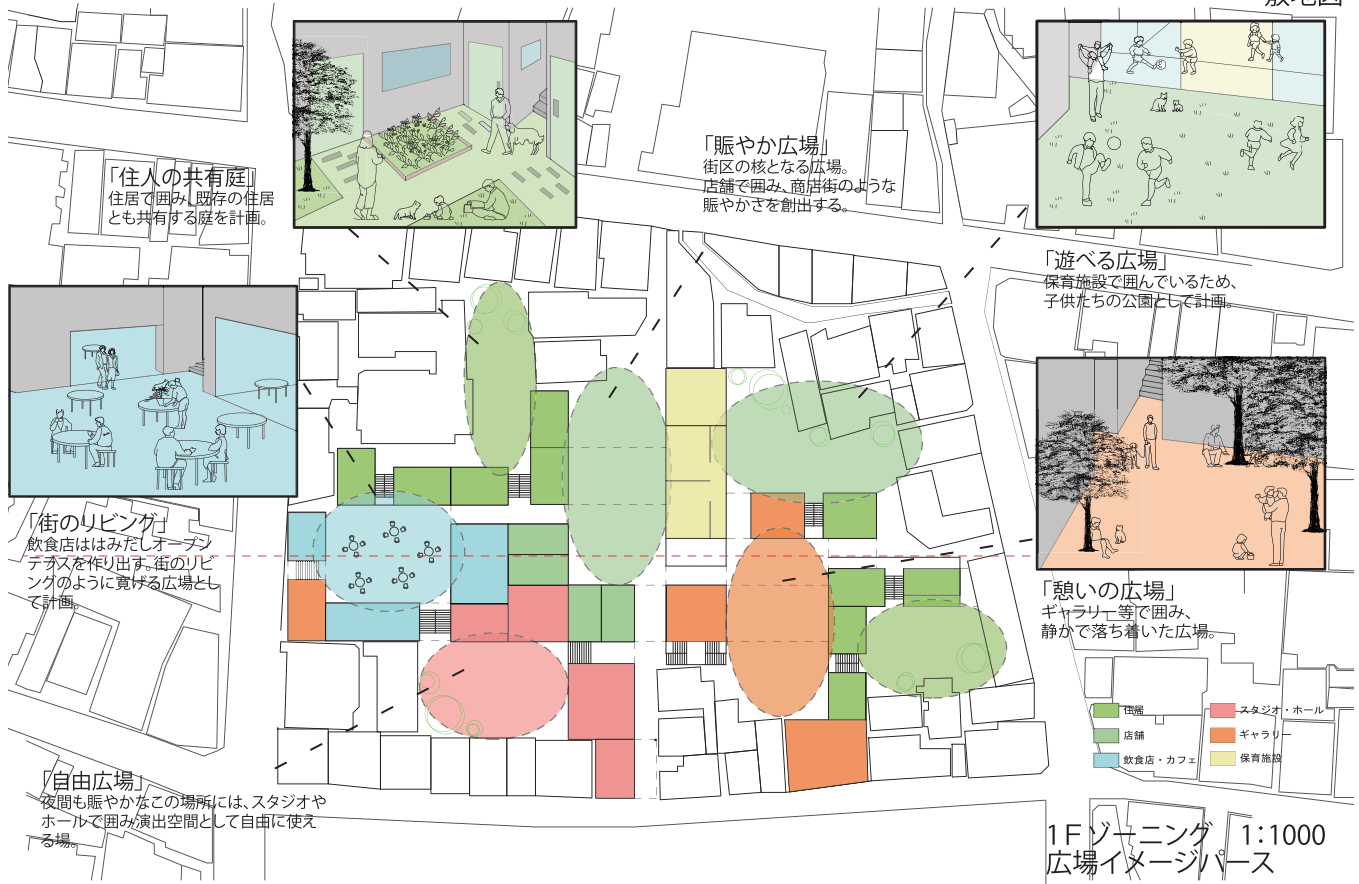


既存の建物の種類と街区周囲の環境をもとに、街区内で広場とするスペースを選定。

スペースを囲むように複合型集合住宅を計画し、広場を構成する。その広場同士をスキマ空間で繋ぐことで広狭の連続を街区に作り出す。



敷地図



断面図 1:1000

万葉線を軸とした たかおかせいプロジェクト —下山の思想から学ぶ、減少化する 市勢に応じたまちづくりの提案—

図面・模型

S=1:200

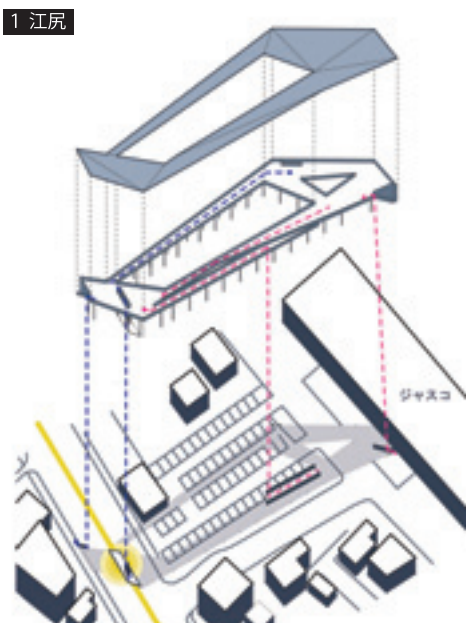
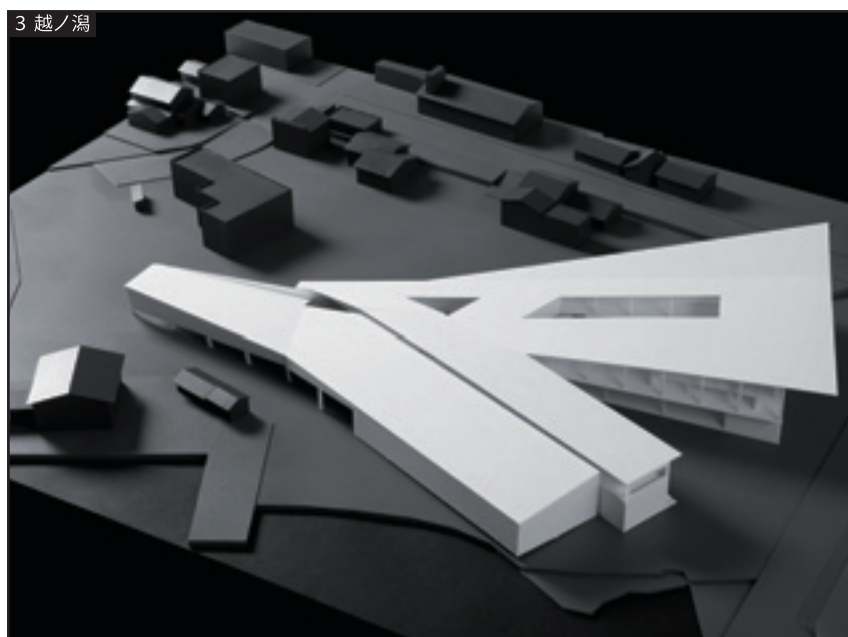
工藤 知恵

Kudo Chie

造形建築科学コース

車での移動を主とした地方都市では、大型商業施設の進退が街のにぎわいに大きな影響を与えている。それらは収益を追求するため敷地を変えてスクラップ&ビルドを繰り返すことから、街に持続的なにぎわいが定着しにくい。東日本大震災以降、エネルギーの浪費をとまなう利便性を見直し、持続可能な暮らしを可能とするまちづくりの在り方が求められている。

そこで、本研究では既存の空き地や利用頻度の低い駐車場を利用し、万葉線の停留所に商業スペースと一体となったパーク&ライド施設を設け、公共交通の利用促進と沿線の持続的なにぎわいを形成することを目的とする。



“路の交叉点”

—瑞泉寺周辺地区の複雑な路地形態における
結節空間の提案—

図面・模型

野原 美紗貴

Nohara Misaki

造形建築科学コース

かつて、瑞泉寺を中心に町が栄え、門前町として物流の中心となっていた南砺市井波地区。しかし、鉄道の開通、閉鎖により町の構成は大きく変化し、瑞泉寺とその周辺の歴史的な街並みは時代の中に取り残され、衰退していった。その中でも路地は、城下町と門前町、両方の特徴を残し、複雑にそして細かく土地を区画している。多様な路地形態の密集と混在により、車の交通には適さない地区である。この複雑な路地形態は、交通の面では不便なものであるが、同時に井波のアイデンティティともなりえる特徴的なものである。これを顕在化し、複雑な路地形態によるアイストップに、歩行者のためのコンパクトなコミュニティ空間を点在させていく。そうすることにより、路地をより魅力的な空間へと変換し、井波の歴史的な街並みや町の構成が強化され、瑞泉寺周辺に人々のコミュニティを再建していく。



10 diagram



それぞれの路地をそのまま敷地の中へ伸ばす

路地を交差させ交差点をつくる

交差点を増幅させ、路地の回遊性をもたせる



T字路

喰違

桁型

多叉路

屈曲

鉤曲



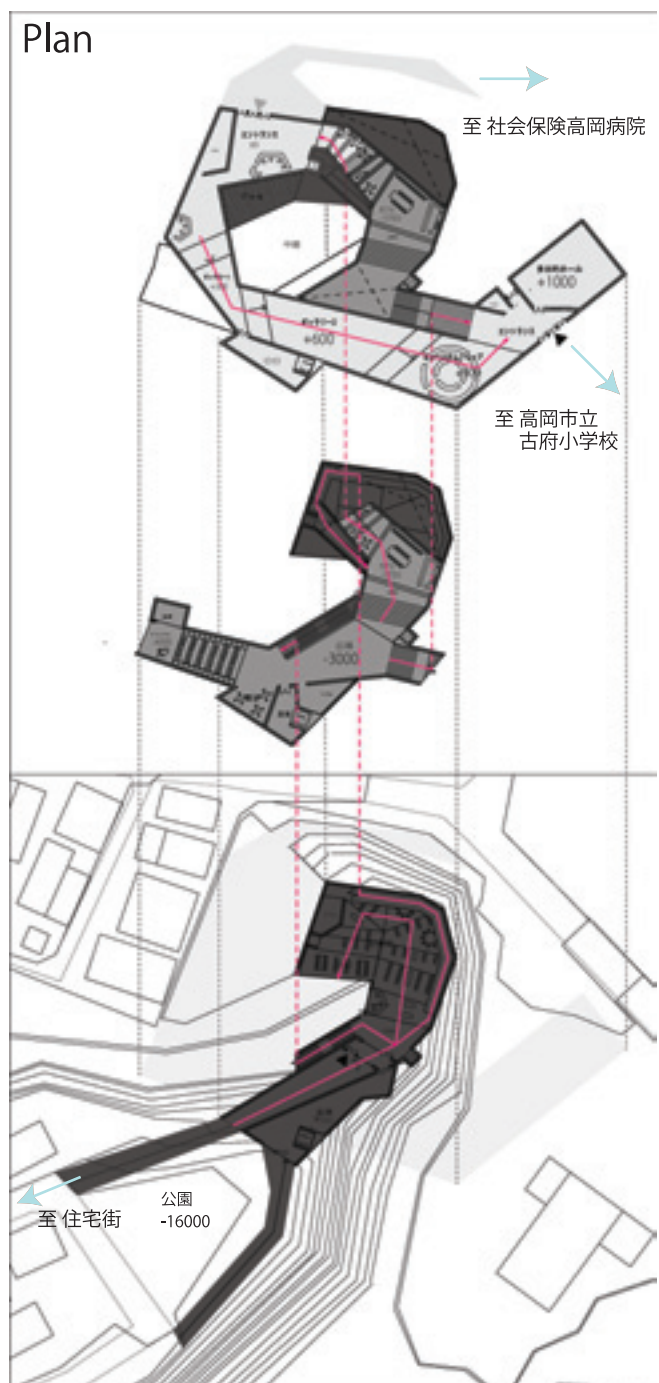
まちなかプラットホーム —高岡市伏木古府地区における 地域をつなぐコミュニティ施設の計画—

図面・模型

澤口 志帆
Sawaguchi Shiho
造形建築科学コース

富山県高岡市伏木は周囲の豊かな自然と起伏の多い土地という環境から、まちなかに多様なシーケンスが生み出されている。一方で、その起伏の多さは、地区を分断する原因ともなり、古府地区では、地形のレベル差が地区中央を横断しているため、病院や小学校と住宅地が分断されている。それらをつなぐ道は暗く通学路として利用されず、デッドスペースとなっている。

そこで、本計画では古府地区の中央部に、起伏の多い地形を活かした回遊性のあるコミュニティ施設を計画し、小学生の通学路を含む、地域の人々の生活動線を交錯させることで「交流の場+見守りの場」をつくりだす。ここでは、吹き抜け空間を内包しながらスパイラル状に展開し、異なるレベルからのアプローチ空間を統合することで、多様な上下の空間の関係性を誘発させるとともに、道路と経路が連続する、地形と擁壁が一体化するといった、土木的スケールと建築的スケールが融合した建築を目指す。



Diagram

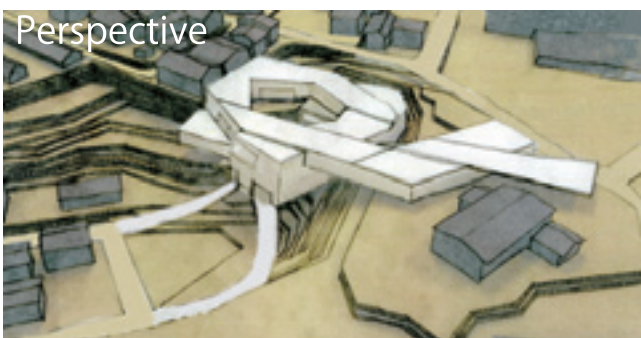
道路の線をひき伸ばす

交わる部分に吹き抜けや縦動線を置き、空間に縦方向の関係を持たせる。

中庭 (=ヴォイドスペース) を中心に置き、取り囲むように各レベルを繋ぐ。



Perspective



住居内遊牧

—高岡市長慶寺における集合住宅の提案—

図面・模型

岩見 理子

Iwami Rico

造形建築科学コース

経済性を優先させた集合住宅では、個人の専有スペースを最大限確保するため、その空間に可変性が乏しく、住民はその限定された空間に合わせて生活することを余儀なくされる。こうした通常の集住形式に対し、最近では、複数人で一軒家を共有するシェアハウスや、リビングスペースなどの共有スペースを充実させた集合住宅が人気を博している。

そこで本研究では、多様化する生活スタイルに適合するように、専有空間を最小限に抑え、共有空間を最大限にまで拡大し、さらに共用レベルの異なる空間を設けることで、プライバシーを守りながら、それらを人々の関係を繋ぐものとして機能させ、多様な空間の関係性を誘発することを目的とする。

敷地は住居が島状に密集して散在する特徴的な景観を有している富山県高岡市長慶寺とし、ここに街区全体を住まいとしてとらえた集合住宅を計画し、人々が街区いっばいに拡大された住まいの中を遊牧しながら暮らすといった新しい集住形式を提案する。



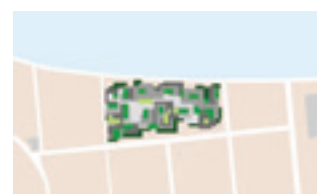
専有空間を最小限に抑え共有空間を最大限に拡大する



専有空間とレベルの異なる共有空間が交わる



Site



Plot Plan ○



Section

再生可能エネルギーのプラントと 自然地形との関係における ランドスケープの提案

—尖閣諸島魚釣島を事例として—

図面・模型

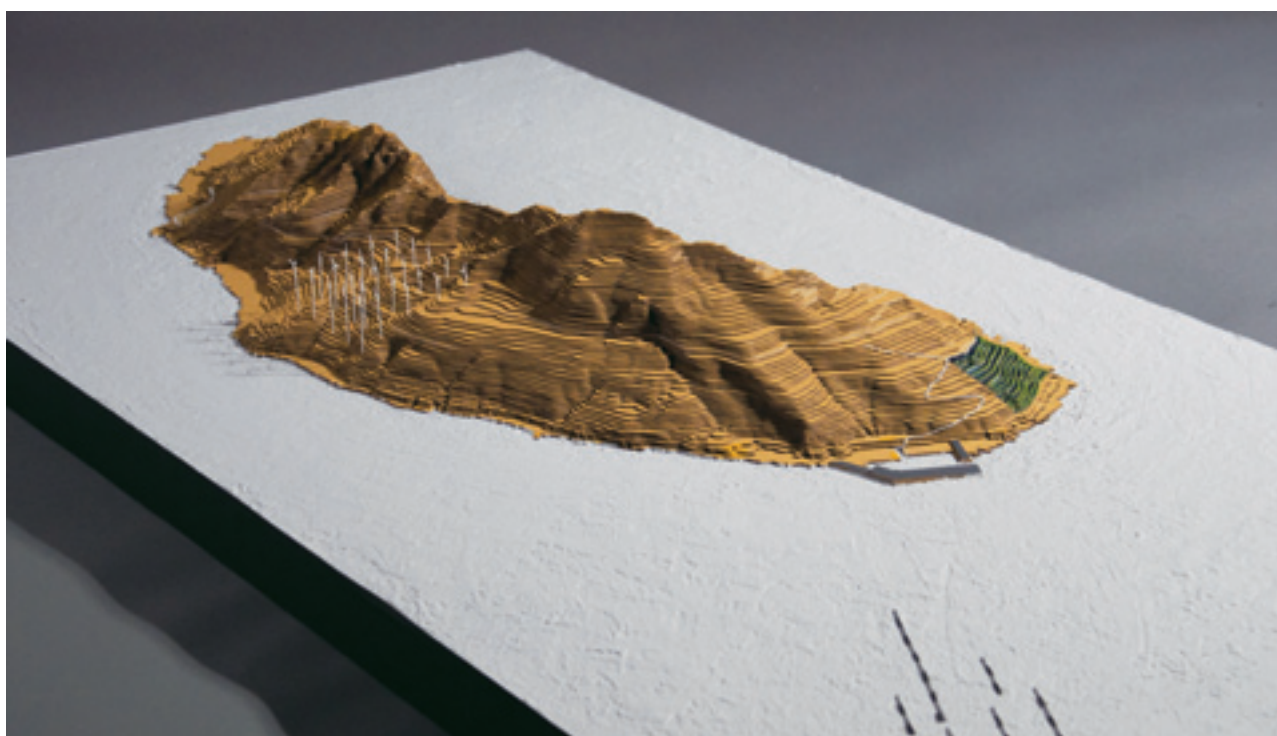
泉 広祐

Izumi Kousuke

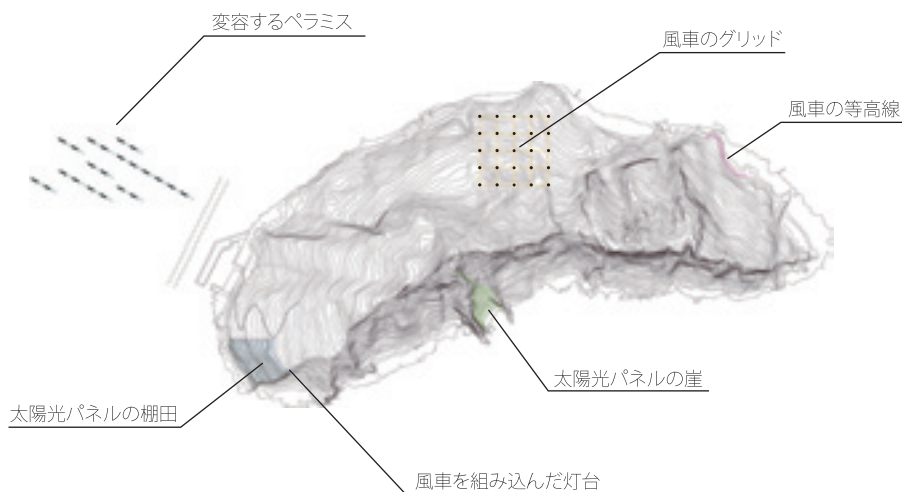
造形建築科学コース

3.11が起因となって発生した福島第一原発事故以降、エネルギーの在り方、考え方が問い直されている。日本政府は原子力発電の代替エネルギーとして再生可能エネルギーを推進する意向を示しており、今後、数多くの大規模な再生可能エネルギーのプラントが建設されることが予想される。こうしたプラントは建設や発電の効率性を優先するため、その基本ユニットを平地に規則的に並べるだけのものが多く、周辺への景観への配慮が欠けている。

そこで、本計画では、再生可能エネルギープラントを地形との関係で再考しそれらのランドスケープの可能性を提案する。敷地は、未開の地であり、かつ領土問題が深刻化している地、尖閣諸島魚釣島とする。ここでは、島全体を再生可能エネルギーのプラントの見学施設とすることで、今後のエネルギーの在り方・考え方を指し示す場とすると共に、日本・中国・台湾の文化や歴史を学べるようにすることで、占有領土ではなく共有領土として尖閣諸島を捉える礎となることを意図している。



俯瞰図



風車を組み込んだ展望台の機能を有する灯台

豎町通りにおける庇を有する商業建築群の ファサードの連続性に関する研究

A study on continuity of the facade of the commercial construction group
with the eaves in the Tatemachi Street

湯上 弥生
Yugami Yayoi
造形建築科学コース

1. 序

金沢市豎町通りは、豎町商店街地区地区計画で庇を有することが定められており、庇の連なりが特徴的な通りである。こうした通りでは、庇の連なりの高さや奥行きの変化により、通りに変調をもたらすこと、または、庇より上は視界が遮られることで、庇上の空間の通りへの影響が希薄なこと等、他の通りとは異なる、独自の通りの様相を有すると考えられる。そこで、本研究では、豎町通りを庇の形式と庇下の建物立面の2水準から検討することで、庇を有する商業建築群の特性の一端を明らかにすることを目的とする。

2. 庇による連続性

豎町通りを構成する79の建築物と、それらが豎町通りと直行する道路によって分割された11の街区を分析対象とした。さらに、庇の高さと奥行きが同時に変化する箇所は不連続性が強いと考え、その箇所での建物の群を【庇による建物群】に分割したところ、11の【庇による建物群】が得られ、そのうち街区を横断するものは3で、多いものでは3つの街区を横断している。(表1)。このことより、庇による連続性は通りと直行する道路によって分断される傾向があるといえる。

これより、建物、【庇による建物群】、街区に対し、庇による連続性を、庇の高さと庇の奥行きとの2つの基準から検討した(図1, 表2)。その結果、庇

の高さは建物境界線で変化することが多く、庇の奥行きは建物境界線と建物内部とは同じ割合で変化することが多いことが分かった。

また、庇の高さや奥行きを揃えることで得られるまとまり(以下、統合範囲)に着目し、その範囲の関係から、高さ・奥行き統合範囲が主従関係をもつ《包含》、高さ・奥行き統合範囲が等価な関係をもつ《交差》の2つを主たる統合形式として設定した。(図2)

《包含》は高さの統合範囲が奥行きの統合範囲を包含することで、〈高さが単位を統合〉するもの、奥行きの統合範囲が高さの統合範囲を包含することで、〈奥行きが単位を統合〉するものに分類され、共に街区内部の建物群で、前者は建物数が比較的少なく、後者は多い傾向があると言える。

一方、《交差》は統合範囲が連鎖するもので、一見複数の統合範囲が途切れているように見えるが、各々の統合範囲の重なり位置する建物を介して、範囲を滑らかに繋げており、街区を横断する等、広域にわたる傾向がある。

3. 庇下の建物立面による連続性

本章では、個々の庇下の立面を単純化し、《面型》、《窓型》、《H型》、《門型》、《柱型》の5つを庇下の立面の構成要素として抽出した。各建物の構成要素数を単数と複数で大別してみると、それぞれ凡そ同じくらい見られた。(図3)

立面の構成要素の統合形式として、同一の構成要素が連なることで連

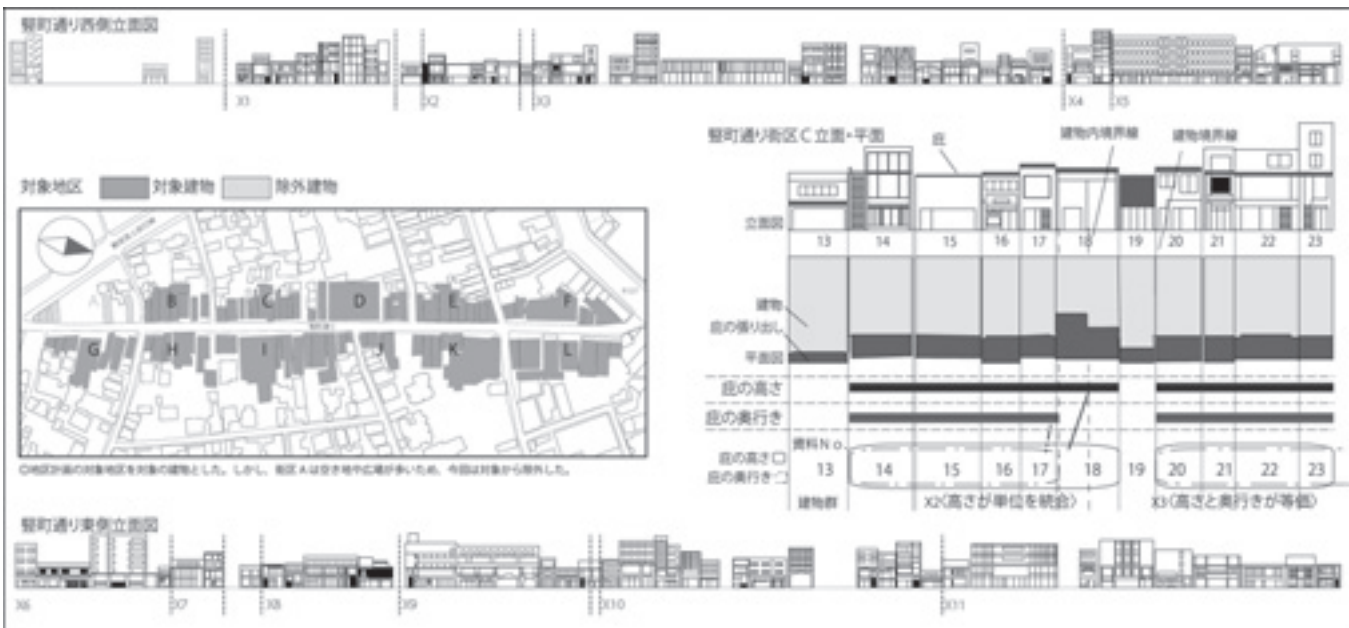


図1. 分析事例

連続性をもたらす【同種反復】、2種類の構成要素が“ABAB”や“AABABB”のように交互に連なることで連続性をもたらす【異種反復】を設定した。これらの統合範囲は建物の境界を横断するものがほとんどだが、共に街区を横断するものは少ない傾向にある。(表3)

3章では、底下面を5つの底下面構成要素と2つの要素間関係で位置づけた。

4. 底の形式と底下の建物立面による連続性

本章では、2章の底による連続性と3章の底下の建物立面による連続性の関係を検討する。

はじめに、底の形式による統合範囲と立面の構成要素の統合範囲の関係を検討する(表4)。同種反復による統合範囲は、底の統合範囲と〈包含〉関係にある場合が多いことがわかる。一方、異種反復による統合範囲は特に底の高さの統合範囲とは〈交差〉する傾向にあるといえる。このことより、底による連続性のなかに、同じ要素の立面が並ぶことで、範囲の狭い連続性をもたらすのに対し、異なる要素の立面が交互に並ぶことで、底による連続性同士をつないでいるといえる。

次に、底の形式による分節線と建物立面の構成要素の分節線との重なりを検討した(表5)。これより、異種反復の分節線については、目立った傾向はみられなかったが、同種反復の分節線については、底の形式による分節線と重なることが基本的に少ない傾向にあり(19/35)、その中でも

表1. 底による建物群の広がり

	街区横断	街区内
建物群	X3,X10,X11	X1,X2,X4-X9
	3	8

表2. 底の形式の変化位置

	建物境界線	建物内
高さ	36	2
奥行き	18	19



図2. 建物群を統合する底の統合要素と主たる統合形式

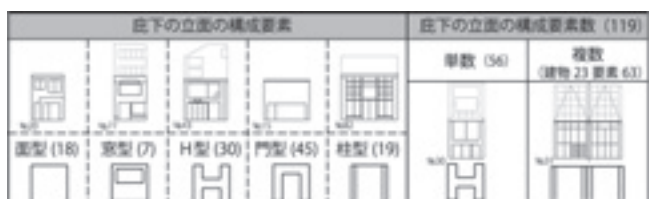


図3. 底下の立面の構成要素と構成要素数

分節線の重なるものに着目すると、奥行きによる分節線より、高さのみよる分節線との重なりが多く見られた(9/18)。このことより、同種反復の分節は底の高さや奥行きの変化を基本的には強化しないが、強化する場合は、底の高さの変化を強化する傾向があるといえる。

以上、2つの基準から同種反復は、底の形式による統合範囲と〈包含〉関係にある場合が多く、かつ底による異種反復は、〈交差〉の関係にある場合が多く、統合範囲の分節を強化する傾向があるといえる。

5. 結

以上、豎町通りの連続性を底と底下の建物立面構成要素の2水準で分析した。

その結果、基本的には、底と底下の建物立面による連続性は、街区の境界で分断されており、さらにそれら街区の中では、底の高さや奥行きが揃うことで得られる連続性が、似たような立面が連なる範囲の狭い連続性を統合する傾向があることを明らかにした。

【主要参考文献】

- 中谷豪・奥山信一・山田秀徳 「街路型建築のファサード表現 ファサードの連続性により形成された都市空間に関する研究(1)」 日本建築学会大会学術講演梗概集 pp.621-622,1999年
- 中谷豪・奥山信一・山田秀徳 「街路型建築のファサード表現 ファサードの連続性により形成された都市空間に関する研究(2)」 日本建築学会大会学術講演梗概集 pp.623-624,1999年

表3. 底下の建物立面の構成要素の統合形式

		建物境界内	建物境界横断	街区を横断する統合形式
立面構成要素の統合形式	同種反復 (24)	13	11	1
	異種反復 (3)	0	3	1

表4. 底の形式と底下の建物立面の構成要素の統合範囲の関係

		包含 (100%)	交差 (0%)
同種反復	高さ	19	6
	奥行き	14	6
異種反復	高さ	0	6
	奥行き	2	2

表5. 底の形式と底下の建物立面の構成要素の統合範囲の分節線の重なり

		無	底の高さ(18)	底の高さと奥行き(12)	底の奥行き(23)
同種反復 (35)	19	9	4	3	
	2	2	2	0	
異種反復 (6)					

Daily and-aily

—高岡駅南口駅前敷地における
駅近接型集合住宅の提案—

図面・模型

渋谷 亮介

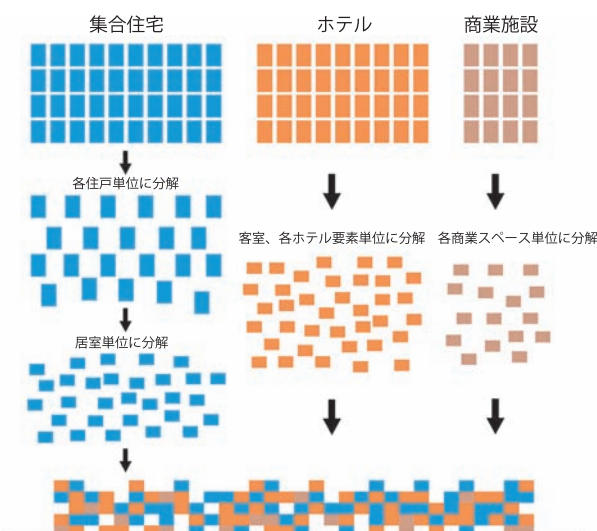
Sibuya Ryouosuke

造形建築科学コース

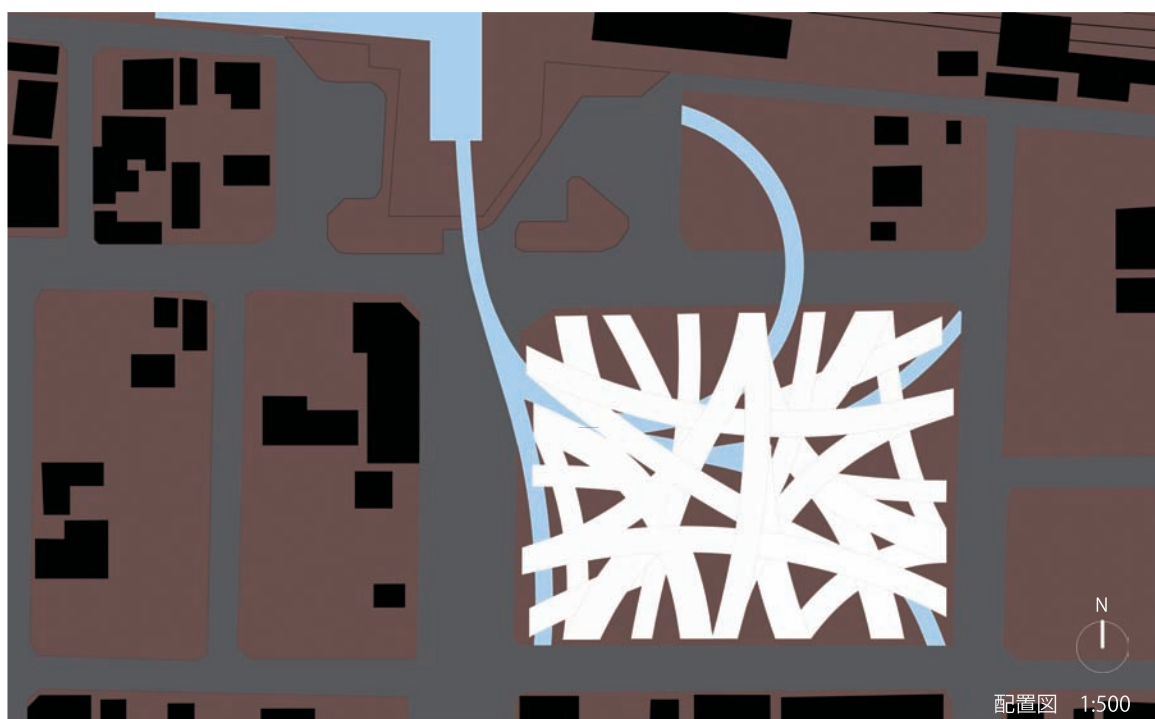
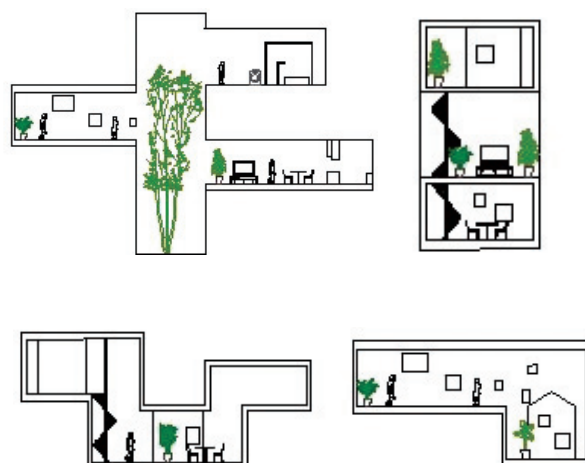
現代の地方都市において、駅周辺に立地する大型商業施設がそのまま駅や駅周辺の繁栄・衰退を大きく左右している。高岡駅南口周辺地域においても、大型商業施設ダイエーの撤退後駅周辺の衰退が進んでおり、この問題は再び同様の商業施設を誘致することでは根本的な解決にはなりえない。そこで本計画では駅という「日常（通勤、通学など）」と「非日常（旅、出張など）」が交錯する性質を用いて、駅周辺の住人と駅利用者を対象とした【ホテル】と【集合住宅】を有する駅近接（直結）型複合施設を設けることで、持続的な駅前の賑わいを作り出すことを目的とする。

具体的な手法としては、各要素を個室単位に分解し、曲線帯状形態の建物に混在させ、各空間を吹抜けてつなぐことで、住民の立場からはホテルという「非日常（旅行）」を、ホテル利用者の立場からは住民と同じように滞在地の「日常（日常生活）」を体験することができるという新たな【滞在型ホテル】と【集合住宅】の関係性を作り出す。

【ダイアグラム】



【部屋イメージ図】



midorinovation

—伊勢市駅前と参宮道の緑化再開発—

図面・模型

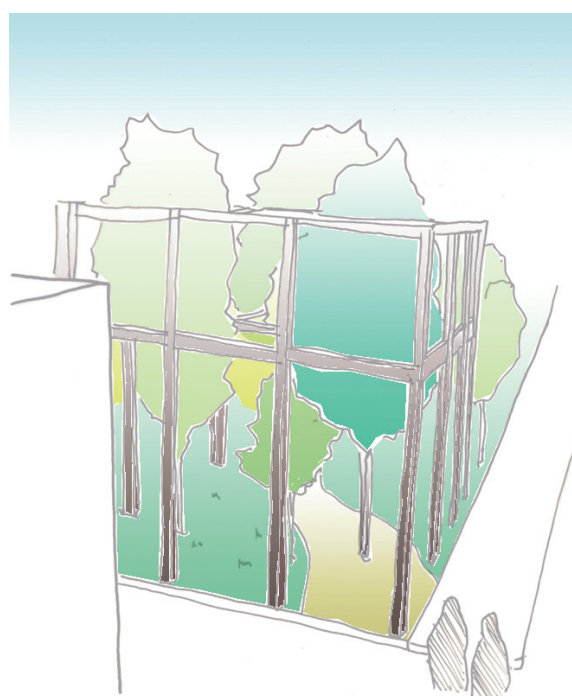
辻村 紋音

Tsujiyura Ayane

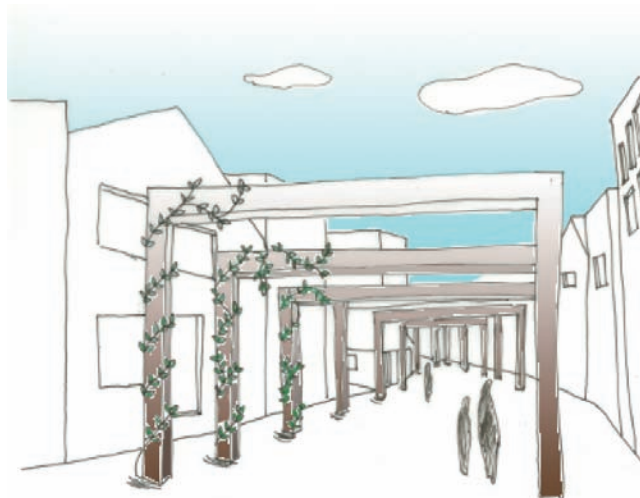
造形建築科学コース

かつては伊勢市の中心市街地として、また伊勢神宮の外宮があることで観光地として栄えていた伊勢市駅前は、大型店舗の撤退をきっかけに空き地、空きビルが目立つ空洞化した駅前空間となってしまった。駅から伊勢神宮まで続く参宮道も同様に、参宮道とは言いがたい閑散とした空間が広がっている。現状を改善するために観光客向けの大型ビルと立体駐車場の建設が計画されているが、同様のできごとが繰り返されるだけなのかもしれない。

そこで本計画では荒廃とした空気を再び建築が計画されるまでの間、仮設的な緑地とし、さらに参道に沿って緑のゲートを設けることで、外宮の特徴の一つである緑を駅前まで拡張し、参宮道および駅前空間の景色を、街の記憶を遡るように修景することを目的とする。



駅前より



参宮道より

暮らし続けるまち

—富山市中心市街地における
高齢者のコンパクトシティ計画—

図面・模型

山口 英里子

Yamaguchi Eriko

造形建築科学コース

コンパクトシティ化を行政が促進している富山市の中心市街地では、多くの分譲マンションが建設され、郊外で暮らす高齢者の住み替えも年々増加している。こうしたマンションはバリアフリーなど高齢者に配慮した仕様とはなっているが、介護機能を持ち合わせていないので、体の自由が利かなくなった際には老人養護施設に入所することになる。また、高齢者の増加に伴い市街地には様々な施設が設けられているが、多くは周辺から孤立し、閉鎖的なものとなっており、高齢者たちが安心して楽しめる街空間とはいえない。

そこで本計画では、住人の状態によって住居の一部がケアユニットとなる、高齢者の終の棲家となりうる集合住宅を計画する。次に、集合住宅を中心とした12の開放的なアクティブスペースを街に点在させ、それらの経路に老人が安全に移動できるよう歩行補助器具や休憩場所を設けることで、街に老人のアクティビティが溢れるようにする。

